

同窓会誌

沼津高専同窓会創設20周年記念号
VOL.11/1987

JOURNAL OF NUMAZU COLLEGE OF TECHNOLOGY ALUMNI ASSOCIATION

NUMAZU COLLEGE OF TECHNOLOGY
ALUMNI ASSOCIATION
ANIVERSARY

20th

1987

同窓

沼津工業高等専門学校同窓会

CONTENTS

Youth

Samuel Ullman

Youth is not a time of life; it is a state of mind; it is not a matter of rosy cheeks, red lips and supple knees; it is a matter of the will, a quality of the imagination, a vigor of the emotions; it is the freshness of the deep springs of life.

Youth means a temperamental predominance of courage over timidity of the appetite, for adventure over the love of ease. This often exists in a man of sixty more than a boy of twenty. Nobody grows old merely by a number of years. We grow old by deserting our ideals.

CONTENTS

| | | |
|----------------|------------------------------|----|
| | ご挨拶／学校長 慶伊 富長 …………… | 2 |
| | 会誌によせて／会長 諏訪部 豊 …………… | 3 |
| | 同窓会に思うこと／副会長 山本 克之 …………… | 4 |
| | 事務長雑感／事務長 平松 雅彦 …………… | 5 |
| 講演 | 図太い神経と、か細い洞察力／名誉教授 市川 良輔 …… | 7 |
| 記念特集 | 沼津高専さまがわり／電気工学科 佐々木俊夫 …………… | 13 |
| | 座談会「同窓会の昨日、今日、明日」 …………… | 17 |
| | 西湘支部紹介／M1 増田 徳一 …………… | 23 |
| 退官だより | 近況報告／名誉教授 柳瀬 晴海 …………… | 27 |
| | 新人類に興う／名誉教授 米崎 茂 …………… | 27 |
| | 合縁機縁のとき／名誉教授 市川 良輔 …………… | 28 |
| | 近況報告と思い出／(元出納係長) 伊東 仁 …………… | 30 |
| | 第3の故郷「室戸」にて／(元庶務係長) 中村 幸男 …… | 30 |
| | 退官・転勤者一覧 …………… | 31 |
| 同窓会によせて | 事務部長 三浦 徳勝 …………… | 32 |
| | 一般科目 三ツ井東司 …………… | 32 |
| | 電気工学科(E6) 江間 敏 …………… | 33 |
| | 一般科目(E12) 遠藤 良樹 …………… | 34 |
| 近況報告 | M1 白井 一夫 …………… | 36 |
| | E9 福山 一成 …………… | 36 |
| | M16 佐田 剛 …………… | 37 |
| | E16 四條 弘次 …………… | 38 |
| | C13 山口(青山)淳子 …………… | 38 |
| | E18 佐野 弘和 …………… | 39 |
| | C15 渡辺 さわ子 …………… | 40 |
| | 第24回東海地区高専大会総合成績表 …………… | 41 |
| 慶弔報告 | M12 渡辺 光弘 …………… | 42 |
| | C15 大嶽 讓治 …………… | 42 |
| | 住所不明者リスト・編集後記 …………… | 43 |

ご挨拶

学校長 慶伊富長

同窓諸兄姉におかれては情勢きびしき折柄、日夜ご奮闘のことと思います。最近の円高不況は困ったものです。しかし、小生のような古狸には昭和初期の不況やら戦後のドル、オイルショックやらいろいろの経験があります。不況となれば不況の打開に知恵を働かせ、好況となればそれに応じた対応を考える、といったものでしょう。ひとつの場面でしか機能しないのは造られたものです。造りだすのはわれわれだ、と思えば火もまた涼と言えるように思います。わが国の今日と明日のギャップを埋める最も有効な手段は科学技術であることは言うまでもないでしょう。明日にむけての諸兄姉のさらなる奮闘に期待するものです。

教育改革の論議が進むなかで、高専教育の成功が評価されております。ご承知のごとく沼津には電子制御工学科が新設されました。本年は豊田など5校に学科が新設されることに決まっていますから、これで13校が学科新設となりました。増設はまだ続きます。入学定員もすでに1万名を越えました。耐震工事のおかげで、母校は面目一新いたしました。引続いて新学科の建物と寮の改修新築と続きます。容れモノが新しくなっただけでなく、先生方の平均年齢も若くなりました。同窓生も教員のなかに増えてきました（寮生指導に威力を発揮されるようです！）国際会議などの先生方の外国出張も増えておりますし、文部省在外研究員で出張される先生は毎年です。在学生も体育大会で着実に好成績をあげようになっていますし、入学者の成績も相変わらず全国一の座にあります。外観・内容ともにフラッグカレッジとしての母校は健全です。

臨教審第二次答申で「高専の分野拡大と専科大学（仮称）への名称変更」が昨年4月提言されました。目下、文部省内で具体化のための審議が終盤にさしかかっており、3月には具体案が出ると思います。各都道府県で芸術、語学、経済、体育などの専科大学づくりが検討されはじめているようです。数年後にはかなり大きな変化が見られるかもしれません。こういった情勢のなかで、臨教審が実地視察したのが本校であり、文部省幹部が訪れたのも本校でした。地の利もあります。トップ高専の名のしからしむるところでしょう。

この沼津高専のために微力を盡すことを念願しております。諸兄姉のご声援をお願いする次第です。

会誌によせて

会長 諏訪部 豊

昭和61年度同窓会活動の主眼である同窓会誌の発行もようやくメドが立ち、ヤレヤレといった気持の今日この頃です。

今回の同窓会誌は通算第11号であり、また同窓会創設20周年記念号でもあります。せっかくの記念号ですから何か特集を……ということになり、電気工学科の佐々木先生に特にお願いして最近の母校の様子を書いていただきました。

また、歴代会長及び会員兼顧問の母校の先生方、等同窓会の歴史に明るい方々に集まっていたいで座談会を開催してみました。

さらに西湘支部の増田さん（M1）からは西湘支部紹介の労作を寄稿していただきました。そしてさらに前回の同窓会総会（60年10月）での市川先生の講演原稿も寄稿していただき色どりをそえていただきました。

その他、毎回恒例の近況報告等々。御協力いただいた方々本当にありがとうございました。当初同窓会誌の発行はそれほど手間はかからないと、たかをくくっていたのですが、いざ始めてみるとなかなか大変なことがわかりました。

原稿の依頼や回収のために何度も学校へ足を運ばねばならず、またなかなか書いてくれない会員への催促の電話もかけねばならず……等々。先人のご苦勞がしのべれます。

次回からは（と言っても次回は次の役員が発行する訳ですが）もう少し原稿の集め方を考えなければならぬかと思われま。

何も近況報告一点張りでもなくとも良いと思います。技術的な（技術的でなくても良い）少論文や小説、エッセイ、ポエム、人生論、結婚観、恋愛論、読後感、等々、何でも結構です。どんな用紙でも結構です。いつでも結構です。

2年に1編ずつ何かを残す。そんな気持ちで書いて下さい。ところで62年度は同窓会誌発行よりもさらに重要な同窓会創設20周年記念事業（詳細は別紙をご覧ください。）、そして同窓会総会がひかえています。

目標は大きく課題は豊富です。そしてそれを会社勤めの合間をぬって（時には仕事を休んで）やらなければなりません。

三役もがんばります。顧問の先生方、理事のみなさん、そして会員諸氏のさらなる御協力を切にお願いする次第です。

同窓会に思うこと

副会長 山本克之

昭和六十一年度同窓会がスタートして、はやくも半年が過ぎました。そして、季節も秋から冬へ、一日ごとに吹く風も厳しさを増してきた今日この頃・・・といっても、この同窓会誌が会員の方々の元に届く頃には、寒い日々の間にも暖かい春の日ざしを感じる季節になっていることでしょう。そして、沼津高専同窓会も創立二十周年を迎え、あらためて、歴史の重さを感じます。

私も、高専を卒業して四年が過ぎ、まだまだ未熟ですが、ようやく技術者の一人としての自覚を持てるようになってきました。ところで、現在私は東芝機械沼津事業所に勤務していますが、社内には沼津高専卒業生で構成された「峰友会」という会があります。総勢約四十名にもなり、各職場に先輩がいるので、新人にとっては心強い味方といえます。しかし半面、全員が勢ぞろいする機会が、どうしても飲会等に限られてしまうため、会そのものに対する魅力も薄れてきてしまっている様に思います。

現在の同窓会においても、これと同様のことが言えるのではないのでしょうか。私自身、副会長という役職に就く前まで、同窓会に対する興味はあまりなかったというのが正直なところです。その原因の一つは、まず、同窓会の存在にメリットが感じられなかったということがあげられます。さらに、同窓会の組織・活動等についてほとんど知らなかったこともあります。そしてもう一つには、私自身が、住所不明者であった為に(新住所を同窓会宛にハガキで送ってはあったのですが・・・)、同窓会からの情報が一切伝わらなかったことがあげられます。考えてみれば、同窓会と会員の間は同窓会名簿というもので結ばれている様なものです。それだけに、同窓会員の名簿管理は、地味な仕事ですが、最も基本となる重要なことであると言えます。会員の方々の中にも、住所不明とはなっていないくとも、同窓会名簿の住所が実家のままという方がかなりいるのではないのでしょうか。同窓会発展の為にぜひとも新住所をハガキにて、本部宛お知らせ下さい。

ところで、冒頭でも書きましたが、同窓会は創設二十周年を迎えます。総会員数も約三千人にもなります。総勢約四十名の「峰友会」ですら、全てをまとめるのに四苦八苦しているのですから、現在の同窓会の様に、本部だけで全てを統制することには限界があります。会員が全国各地に散在していることを考えると、例えば西湘地区の様に、各地における支部活動がもっと活発化することが必要です。そして、将来的には、同窓会の活動は支部中心に、本部はその援助のみといった組織に移り変わる必要があると思います。二十歳になった同窓会も転換期を迎えているのではないのでしょうか。

三役の一人になったということで、同窓会に対する考え方も随分変わった様に思います。同窓会はいくまで、会員のためにある組織ですから、会員にとって魅力の有るものでなくてはなりません。では、魅力を感じる同窓会とはどうあるべきなのでしょう。これは、会員一人一人によって答が異なるのではないのでしょうか。そして、その種々雑多な答が、本部に届く様になってこそ、同窓会は次のステップへと上がることができると思います。最後に一言、二十一世紀の同窓会への第一歩として創設二十周年記念事業を全員で成功させようではありませんか。

事務長雑感

事務長 平松雅彦

沼津高専同窓会も今年でめでたく20周年を迎えることとなり高専の歴史も重みが増してきた感があります。

現在会員数も3000名を越えるほどまでに成長し、同窓会の基盤も着実に確立されつつあります。

事実、私ごとで恐縮ですが、お茶くみだった私が現在こうして事務長という大役についているのですから(同窓会誌第8号参照)。

しかしながら現在の同窓会を私のかってながらに分析しますと、まだまだ改善しなければならない点が多々あり、20周年記念というおめでたい席ではありますが、将来の同窓会がどうあるべきか考えてみたいと思います。

1 同窓会業務の質的向上

現在の同窓会業務は、名簿作り、同窓会誌の発行、同窓会だよりの発行、総会といったところが主な仕事ですが、3役をはじめ理事共々これら業務を遂行するだけで精一杯というのが現状と思われる。

従っていかに単純作業を減らして理事の負担を少なくし、限られた時間を有効に活用していくか、これが重要と思われます。幸いにも、名簿はコンピュータにインプットされており、発送業務等も業者に代行してもらうようになっております。

2 財源の確保

この件に関しては前々からいわれていますように、早急に対応を考えなければならない時期にきています。

現在は一応総会と同窓会誌の発行を1年毎に行っていることと、終身会員の値上げ(10,000円→15,000円)によって急場をしのいでおりますが、年々増え続ける会員に対して一定の収入源ではもう先が見えております。従って定期的なイベントの開催による収益の確保または、寄付金収集に対する体制作りが必要となってくると思われます。

3 同窓会の組織作り

昨年夏、西湘支部より納涼会に招待され、支部の活動を拝見することができました。西湘支部では年2回程度このような会を催しているようですが、名簿もしっかりできており、本地区在住者はもとより本地区出身者までわかるように整理されていて我々3役は支部組織の重要性を痛感致しました。これは増田氏(M1)をはじめとする諸先輩方の御助力の賜ものであることはいまでもありません。

従ってこのような支部活動が他の地域まで及び、本部と支部とでネットワークを結び、支部の活動が本部を動かす組織作りが必要と思われます。

講演 「図太い神経と、か細い洞察力」

——光源氏の生き方——

沼津高専名誉教授 市川良輔

- ①合縁奇縁
 - ②源氏物語—平安時代—紫式部—全編五十四帖（巻）
 - ③（中心人物）光源氏……桐壺（第一巻）、帚木・空蝉
・夕顔・若紫・末摘花…etc
 - ④「雲隠（くもがくれ）」の巻 ⑤薫（大将）
 - ⑥宇治十帖 ⑦「須磨源氏」=第十二巻「須磨」
 - ⑧「匂（におう）」の巻
 - ⑨「光かくれたまひにし後、かの御影に立ちつき給ふべき人、そこらの御すえずえにありがたかりけり……」
 - ⑩宿命と悲劇の恋の物語—大悲恋譚—大エレジエ
 - ⑪桐壺帝の寵愛→桐壺更衣 ⑫藤壺ノ女御
 - ⑬臣籍降下=源氏 ⑭冷泉院 ⑮女三の宮 ⑯柏木
 - ⑰葵の上=左大臣ノ女 ⑱右大臣
 - ⑲帚木ノ巻「雨夜の品定め」 ⑳頭中将
- 「幸福は出来合いではだめだ、あつらえでなければならぬ…」—アンドレージッド 〈背徳者〉

皆さん、どうもごぶさたして居ります。今日はまた忙しい中を総会に出席され、ご苦労さんです。

理事会で本年度の総会のプログラムの中に、まあ座興の一つとでも言う意味になりましょうか、ちょっとした口演めいたものでもいれてみたらという話になつたらしく、そのころみとして、どういふわけか先ず私に何かしゃべると、常任顧問の柳下教官からきびしく脅迫されました。とてもそんながらではないのですが、もともと小心でおっちょこちょいのところへ、他ならぬわが沼津高専同窓会のことですので、折角の期待にどうにか応じなければと、多少悲壮な覚悟をきめた次第ですが、本当のところ、同窓会の総会むきに一体どんな話をすればよいのか、仲々見当がつかない—つかなかったわけです。

実は、もうご承知の方も多いと思いますが、私もお陰様で今年度一杯でどうやら無事、定年退官ということになります。したがって、同窓会の方も今日この総会が現職専任としての最後の出席というわけですが、高専就任が一期生諸君の入学と一緒にですから、在職二十四年間になるわけで、—もちろん学校では授業編成の関係で全然教室での国語授業を持ち得なかった学年の諸君もあるわけですが、ともかくまあ二十四年もの長い間、よくまあ図々しく、いい加減な授業で出鱈目ばかりしゃべり続けて来たものと、われながら、また今さらながら

あと一点懸念されるのが、本部自身の組織作りです。沼津高専同窓会発足当時は、3役をはじめ関係者共々相当の御苦労があったことと存じますが、理事の人数も少なく世代のギャップもほとんどない為、かなりまとまっていたと思われまふ。しかしながら現在は理事の数だけでも120名を越えるほど大きい物となり、仮に全員出席するとしたら理事会を開く会場すらありません（実際は幸か不幸かそれだけの人数が集まったことはありません）。

従って、同窓会活動を見直し、その事務を細分化してそれに合わせた組織作りを行い、理事をシフトさせていく運営が必要と思われまふ。

4 まとめ

最後に現在の沼津高専同窓会は、今の経済と同様に安定成長期に入っており、言い換えれば、今、組織作り動き出す時期にきていると言えます。沼津高専同窓会の規模、組織力、資金力もあと30年ぐらいで決まってしまうと思われまふ。従って諸先輩が築き上げた同窓会が、今はやりの言葉ではありませんが空洞化現象を起こすことなく後輩に受け継がれ発展していくことを切実に望んで終りと致します。

ちよっぴりはザンゲしておかなくてはという気持ちにならないわけでもありませんが、然しながら今日はまあそんなわけで臆面もなく、またあえてこの「でたらめ」の総決算というか、どうせもうこの図々しさの総復習みたいなことでも申し上げて、それこそもうウン十年以来の高専時代の国語授業のフニキをちよっぴり再現させるのもよからうと思いついたわけです。「図太い神経と、か細い洞察力」という次第です。

それで、いささか私事に過ぎて恐縮ですが、二十四年前に、全くの運命のいたずらというか、合縁奇縁とでもいうか—この合縁奇縁ということばは、一期生諸君が最初の卒業生として出てゆく時、諸君お互い同志で作った「ながれ」という文集、まっ赤な表紙がついていましたあれに、私の気持を寄せた文章の題名に調子づいて使ったことがありましたが、覚えてる人があるかも知れません。—それこそ正に二十四年間、バカの一つおぼえのように、いつの期の学生諸君にも授業持った限り一度以上は言ってみたことと思います。つまり、高専に学び高専を卒業して技術者として世に出てゆく、というよりもこれからの世の中で技術者として生きてゆく上で大事なものは何かという、それを私の考え方、全く私だけの勝手な、謂うなれば独断と偏見の考えに過ぎませんが……言葉で言っただけで、この「図太い神経と、か細い洞察力=ものを見抜く力」である、あるのではなからうかということだったわけです。今考えてみれば、技術者でない私が技術者たらんとする学生に、それこそ教師の役得とばかりいい気になってこんなことを言ったのですから、まことにオコがましい限りかも知れないとは思いますが、それでも今まで卒業生諸君にこうした同窓会同期生会などはもちろん、その他でも時たま折あって昔を話すことがある時、よく「授業で教わったことなんかは殆ど忘れてしまったが、本読めと言ったことと、図太い神経とか細い洞察力だけは覚えている」と、異口同音のように言ってくれる卒業生が相当にあります。有難いことですが、もちろんあたっているかどうか、あたっていたかどうか全くわかりませんものの、ともかくある面で技術者に必要なものが、この図太い神経と、か細い洞察力ではなからうかということは、そんなふういつまでも覚えている諸君があるものですから、今もってまだ私の頭の中であんまり変わっていない気がするわけです。そこで実は、今日もやっぱりこれを枕にして少しばかりの時間、皆さんが在校中には、高専の一般科目国語の時間数が少なく

いつも私が話すべくして話し得なかった日本古典、それも代表的な源氏物語の内容のごく一部分の中心人物、光源氏の生き方というようなものと、この「図太き、か細き」ということを結びつけてみる——例によって昔ながらのこじつけかも知れませんが——ともかくそんなことをいそいで申してみようと思います。といいますのも、昔とちがって今や皆さん堂々たる社会人、それぞれ一かどの市民社会の中枢に位置し、而も高専時代からの初念どおり名に負う技術者として活躍しているわけですが、沼津高専出は沼津高専出それなりの有為な社会人、技術者としての一般教養をいまなお常により広め豊かにし続けようとする、その多少の参考にでもしていただければ幸いです。言うまでもなく先端技術の世の中の近ごろですが、一方にまだ依然として古典ブームが言われ、私などには飯の種ですと相変らずトボトボと読み続けている源氏物語、これと図太い神経、か細い洞察力が、果してどう関係するのか、この機会にしばらくちょっと皆さんの頭の片すみにおいてみてもらうのもよいかも知れないと思うわけです。

それで、源氏物語の話に入ります。

先ず、源氏物語と言いますと、わが国の平安時代に紫式部という女性を中心作者として成立した全編五十四帖もある龐大な物語で、世界的にも有名なものであることは、もはや普通の常識になっていることです。しかしながら、やや逆説的な言い方をしますが、この世界的名作、完璧といわれる物語でありながら、ただ一つ不幸なこと、何としても惜しいと思われる点の一つある気がします。それは何かと言うと、源氏物語はあまりにも長すぎる、龐大すぎるということではないだろうかと思うのです。

源氏物語五十四帖、第一の中心人物光源氏の誕生以前である「桐壺」の巻——知っているでしょうが、源氏物語は第一巻から五十四巻まで巻ごとの名前がついています。第一巻が桐壺の巻、……桐ツボです、タンツボではない。(笑声) 桐壺、帚木、空蟬、夕顔、若紫……というように全部名前がありますが、その第一巻桐壺の巻から始まって四十一帖と四十二帖の間の「雲隠れ」の巻のところでは光源氏が亡くなり、その後、今度は光源氏の子供とされる薫(かおる)という人物——子供とされるというのは、本当は光源氏の実子ではないのですが、この人物、薫の大將というのが全体的には第二の中心人物になり、最後の方の有名な「宇治十帖」に展開するというわけですが、昔から源氏物語を読むことに対して「須磨源氏」などという言葉があって、第十二巻目の「須磨」の巻あたりまで読むと疲れて止めてしまい、しばらくしてまたはじめから読みはじめるが、やはりまた須磨でストップしてしまうという、精一ぱいの読み方がこの程度だ

という意味ですが、こんな皮肉めいたことが古くから言われているくらい、源氏物語は非常に長い小説なのです。ですから、この様に長いために、国民の財宝であり先祖伝来のほこり高い貴重品でありながら、全部を丁寧確実に読み通す人は一般にはそう多くはいないといわれています。もちろん現代社会の一般教養として、源氏物語はもう古典原文で読むのでなくとも、全編の現代語訳いわゆる現代文の源氏物語なども多く、文庫本でも出版されていますし極端にはマンガの源氏物語まであるくらいですから、読もうと思えば現代の小説を読むにちかい感覚で読めるでしょうが、ともかく長くて読み切れないのですね。

これも知っている人があるかも知れませんが、もう先年亡くなりました慶応大学の名誉教授で一頃テレビなどでもタレント教授などと言われた池田弥三郎という方、私には折口門のアニ弟子で源氏の学者だったのですが、この人が源氏物語の長さということに関して「小説はただ長いというだけでは価値に関係はない。小説の長さは書こうとする内容によってきまってくるもので、どうしても書かなければならない内容に対して、どうしても必要な長さでなくてはならない、そういう見方をすると、今日われわれの手に残された源氏物語はかなり無駄な部分があるといえそうだ」というような意味のことを言ったことがありました。

たとえば、今ちょっと言った源氏物語の後の方、いわゆる宇治十帖、源氏の五十四帖あるそのおしまいの十巻で、大体、物語の舞台が宇治—京都の宇治ですね—にうつるから宇治十帖といっておりますが、これは源氏、中心人物の光源氏という人が亡くなってから「匂(におう)」という巻があって、それからあと十三巻になり、その三つばかりあんまり面白くない巻があって、そこから宇治の話に入るんです。光源氏が亡くなってすぐ次の「匂」という巻の一番書き出しのところは「光かくれたまひにし後、かの御影に立ちつぎ給ふべき人そらの御すええにありがたかりけり」となっています。つまり光源氏が亡くなったのちに、世間を見回してみても光源氏に及ぶ人間はいなかったという書き出しなのです。だから、これから後の話はずまらないってことがよくわかるでしょう。光源氏ほどの人間は何処を見廻してもいませんという話をするのだから、面白いわけがないんですね。だから、光源氏が亡くなってからの後の話の方はもう専門の研究者にまかせて止めてしまえばいい、一般の教養としての源氏、日本の国民大衆の良識のための源氏は、ここでばーんと切って捨ててしまえばいい、すると源氏物語はいきなり三分の二になってしまうんですね。大分短くなります。

しかしまあこれは極端な一例で、それがいいか悪いか

も単純には言えません。ですから余談になりましたが、それでちょっとあらためて言いますと、今まで上げました中心人物であるというこの光源氏という人物についてですが、もちろんこれはこの世に実際に居た人物ではありません。「源氏物語」という小説の主人公です。源氏物語はこの光源氏という理想的な男性を中心にしたはなやかな一大恋愛絵巻であると普通に言われ、源氏をめぐって全巻では六十人近い女性が描かれているわけです。ですから此の面で光源氏という名を今まで知ったことのある人にまあ皮相的表面的に、光源氏という人は恋愛のチャンピオンとして女性から女性へと、蝶が花から花へ飛び歩くように浮気なつき合いを重ねていった人だというように考えられたりしています。光源氏の行動には確かにそういう一面があります。はなやかな女性との交際のにぎわしさがその一生をいろどっていることはたしかです。

然し、源氏物語はけっしてはなやかな恋愛だけがくりひろげられているというものではなく、光源氏という人物はただそれだけの人物ではありませんでした。

話を急ぐので、概論めいた結論的なことを先に言ってしまうのですが、源氏物語が恋愛絵巻だという言い方をすれば、私は、源氏物語は恋愛物語であっても宿命と悲劇の恋の物語、いわば一大悲恋譚、一大エレジーだと言いたいわけです。また光源氏その人も、宿命に耐え自己の人生の秘密と悲運をじーっとこらえ続け、そして着々と自己を作り上げたという、確かに結果的には大小説の主人公たるに相応しい非凡な人間です。が、その要素となる一つ一つの時点時処では幾度か失敗もし、それと同じようなあやまちを犯したりもするという平凡な一人間なのです。けれども大事なことは、そういう失敗をかさねているうちに次第に人間として磨かれていったということです。一家一門をその翼の中にしっかりと抱いた大きな人物となったわけですが、地位や身分がそうなったばかりでなく、人間そのものがゆたかで大がらな人物になったのです。しかも必ずしも単純な“善人”ではありません。前に引いた池田弥三郎さんなどは、光源氏その「しぶとく強い心」——たしかしぶとく強いという言葉で表現していましたが、その心は、いうなればその「図太い神経ゆえの心」は、ときには悪ともいうべき方向にも働きかける、ただ光源氏の築き上げた人間の大きさが、その悪をも正当化してしまうのであって、それほど大きく磨き上げられた理想的な人間の像を日本文学の上で他に知らない、というようなことを言っていたほどです。

具体的な内容を抜きにしてこうした概論ばかり言ってみても仕方ありませんが、ともかく私は源氏物語を読んで、こういう人間的な完成は、光源氏の場合一生か

けての歩みだったと思われ教えられるのです。妙にお説教じみですが、人間というものは何時も完全な姿で其処にいるのではないと思います。長い一生の間にその人間が完成していくのでしょうか。いまの場合源氏物語の中心人物光源氏の生き方、生き方の理念のようなものをそう感じ取ることが出来るのではなからうかと思うわけです。

それで、全く抽象的に結論を先に言うてしまうようなことになりましたので、もうちょっと具体的に源氏の全体のあらすじをつづめて一言で言ってみますと、さっき言いましたように源氏物語は「一大恋愛悲劇」であろうということです。このことも一寸また頭においてもらいたいと思います。

中心人物の光源氏は桐壺の帝という方に殊の外寵愛された桐壺の更衣という人を母とするのですが、この更衣はあまりにも帝に寵愛されたがために他の女性たちの妬みや恨みを買ったことも手伝って……昔から女はねたみ深いから気をつけた方がいいと——これは諸君の学生時代に言っておくべきだったかも知れない。(笑声)——ともかくこれでこの人は病気になる光源氏が三つの時に世を去ってしまいます。もちろん桐壺の帝は大いに嘆き悲しみます。そしてあまりにも大きな落胆を見かねて周囲の人たちのすすめで亡き桐壺更衣にそっくりとってよいような藤壺の女御という方を新しく入内させます。つまり光源氏にとっては新しい母、継母になるわけです。源氏は父の帝の配慮で皇族でいるよりも臣下に降下した方がよいということで臣籍に降る、つまり皇族でありながら臣下に降った人を源氏と言うのですが、その源氏になりましたが、子供心にも新しい母が亡き実母そっくりだという人々の話を聞き、その継母に実母の面影を通わせて慕わしく思い続けるわけです。この辺にすでに源氏物語の悲劇性、光源氏の宿命の悲しさといったものが大きく胚胎しているのですが、その意味で、この藤壺と源氏との関係は最も重要で、謂わば源氏物語の命脈である訳です。つまり光源氏という人は生まれる前から——生まれる前からというのも変ですが——その母の桐壺の更衣という人がすでに悲劇的な境遇と悲しい定めのままに源氏を生み落してまもなく亡くなってしまい、残された源氏が未だ小さいころ、いわゆるまま母となったこの藤壺という人が亡き実母によく似ていた——似ていなければよかったんですが、そんなこと言っても仕様がないうで——似ていたばかりにこれが悲劇のもとになる……実母に似ているから幸福なはずだと想像したいのですが、実際は不幸のもと、悲しい運命の種がまかれたというわけですね。つまり源氏はもの心ついた頃から人々の話で、お前のお母さんは亡くなった実のお母さんとそっくりだと聞かされ、「母」なるものに対して自然にストレート

に普通一般の人が持つ意識や感情が、源氏の場合にはその出発点からプラス・アルファがあります。源氏が母を見る目、母を思う心にははじめからシンプリシティーでないものがあって、それが源氏だって何時までも子供ではない、すすすくどンドン成長して一人の男となってゆく。それが、つまり亡き母を思い今の母を慕う気持——それが高じて来ていつかそれが藤壺との恋、継母と継子の恋になる——そんなことがあるものかなあ…と経験のない私なんか不思議に思うこともあるが、経験のないものが思っても仕方ないのでして（笑）——困るのは、その経験のない者がこの異常な経験の話をわからせよう、源氏物語というものを説明したりわからせたりしようと苦労しなければならぬので……まあ幸いなことに学校の教科書なんかこの前後はすばと抜いてある、このあたりは妙に遠慮してあるのですが、ともかく今でも話すのはちょっと難しいというか辛いというか、またくすぐったいともいうようで話し方に技巧を要するところで……といて此処を逃げてしまっは源氏の本質や本筋は全く隠していることになってしまっは何んにもならないので、私のような気の小さい男は心を鬼にして話はするのですが、まあここを抜いているのですから学校の授業なんてものは実におめでたいものなんですね。…（笑）

ともかく本論としまして、この源氏と藤壺との恋、それが行きつくところまで行きつく。端的に言っしまえば道ならぬ恋、不倫の罪、のちの世で俗にいう不義密通ということになるわけで、本当はこの辺だけはどうしても原典を生かして解説すべきかも知れませんが、ともあれ源氏と藤壺との間に生まれたのが、後の冷泉院という帝になり、源氏は実の子であるこの帝に父でありながら臣下として家来として仕えるわけで、いわば源氏は一生この悲しい運命とこよない秘密の定めを負い続けねばならぬわけですが、そればかりかずっと後篇の方になって、今度は源氏自身がまたこのような自ら作った因果の応報をうけなければならぬ。つまり源氏の晩年のころの妻である「女三の宮」という人が、源氏の妻でありながら、こともあろうに源氏の友人の息子の「柏木」という男性と通じ、その間に生まれたのが「薫の大将」——さっき言いましたカオル……身体からジャスミンのにおいがかかっていた？なんて……そんなことはないんで……（笑）、この人にして、源氏はわが子ならぬ薫大将をわが子としなければならぬ。これまた言っみれば罪の応報という悲しい運命と暗い秘密の宿命の物語ということになります。

以上、ごくザッと主題に近づけるために梗概的なほんの一部分を話したに過ぎませんので、これでは全く源氏物語というものをその一面片面で押しつけるようにな

ってしまいますが、何としても源氏物語がこの源氏と藤壺の一大悲恋物語、一大エピソードということを私は言いたいのでして、そしてこれが源氏物語の大きな幹線的な筋になり、光源氏は生まれた時からそれこそ十五・十六・十七と、わたしの人生暗かったなんていう歌ではありませんが、それが明るかったか暗かったかなんてことよりも、先ず何よりも彼の人生のすべてが藤壺への思慕一すじにつらぬき続けたのであり、そこに彼の生き方が決められていったのだと言えると思うのです。

そしてこのことははじめにかかげたように、光源氏というのは決してもう生まれた時から幸福な生活をずーと送ってきた人ではないという証拠になるのだと私は思うのです。

ちょっとくりかえし的な言い方になりますが、源氏が三つの時に母親が亡くなったといったときに言い忘れたのですが、母親が亡くなったということは、当時は子供を育ててるのはみんな母方が育てます。母方のバックになっている家の人たちがいろんな、いやな言葉で言えば金をつぎ込んで儀式も美々しくするとか、衣服でも何でもいろんなものをさかんに金をかけて、うしろからバックアップして後見役として世話をし、そして立派に世間を渡って行けるようにさせるわけです。光源氏は三つの時に唯でさえ身分の低いお母さんが亡くなってしまっ、光源氏のバックには何んにもそういう勢力がない。それで、これも話を省略してしまったけれど、源氏は最初に正妻として葵の上という人と結婚することになったのです。葵の上というのは時の左大臣の娘ですから、バックにはこの左大臣がついているのです。ところが、その左大臣と最も争っている、当時の世の中で最も争っていたのが右大臣の家です。右大臣の一家は一家を上げて光大臣を引きずりおろそうとしている、もう何か傷があったら光源氏をやっつけようとかかっている一家なんですね。だから光源氏のまだ十七、十八歳といっところは、けっして光源氏にとって安心した時代でも世間でもない。いわゆる羽ぶりよく此の世をばわが世とぞ思っような世の中ではとてもなかったのです。多少でも光源氏の失敗が世間に知れたらば、それを理由にして光源氏を引きずり落とそうとする勢力が一方において虎視眈々として狙っていたわけなんです。そういう時だったから、まして藤壺との間にそういう秘密の子供が出来ているなんてことは多少とも世間に洩らすわけにはいかなかったのです。——この秘密を光源氏はとうとう一生誰にも洩らさず押し通してしまっ。つまりこれが光源氏の一生を通じて胸一つにおさめた大きな秘密だったのであり、源氏物語はこの主人公源氏の大きな秘密を軸に展開してゆく、前に言っような一大エピソードであるのです。

こういっように言っきて、私がさらにつけ加えたい

のは、こんな大きな秘密をじーっと胸に抱いて全く口外することなく一生を過ごすといっことは、よほど強い意志の人でなければ出来なだろうといっことなんです。

諸君なんかでもいろんな秘密があると思っます。光源氏ほど大した秘密ではないでしよっけれども（笑）。——誰でも多少の秘密はあるだろっと思っます。けれどもその秘密を全然人に洩らさずじーっと胸にたたみこんでおくといっことはなかなか出来なだと思っます。…「これはねえ、ぜったいに秘密なんだ、君だけに話すんだが…」てなこと言って結局しゃべっちゃうんですね。するとそれを聞いた人も「これは絶対に秘密でねえ、こっだけの話なんだがネエ……」なんてべらべら話してしまっ。（笑声）こっだけの話だなんて何処でもしゃべっている、それが世間普通です。私なんか根がおっちょこちょいなんで、友人や学生と一緒になってべちゃくちゃしゃべり合うのが好きな方ですから、秘密を守って胸の中にじーっと耐えているなんてとてもむづかしいことですね。また、そういう奴は嫌なやつだと思っます。秘密をじーっともって「あいつはあんなこと言ってるけれど、ほんとはこうなんだ」なんてことを自分ひとりだけ知っているなんて奴はいやな奴と思ったいですね。

光源氏はそういう嫌な男です。自分の身の上で起った秘密が、若し世間に洩れたら大変だといっような秘密は腹の中に入れて、自分の胸に畳み込んで生涯明かさないでいることの出来る男です。そういうしぶとい、図太い神経の男です光源氏は。強いんですね。生半可な人物じゃないんです。

今日は全く時間がないのでこっでは勿論詳しくは触れられませんが、「桐壺」の次の「帚木」の巻の「雨夜の品定め」といっ段で、男たちがいろいろと恋人や女性の話をしたとき、光源氏はその親友であり従兄でもありまた義理の兄にもあたるといっような関係の「頭中将」といっ人が、自分の、つまり頭中将自身の恋人が行方不明になってしまっていることを涙ぐんで話したのを聞いたことがあり、さらにあとの「夕顔」の巻で、実はその恋人——頭中将の恋人をゆくりなくも不図したことで源氏が見つけ出すのですが、それを毎日頭中将と顔を合っせていながらも、頭の中將には一言も知らさず明かさず、そればかりかその女性を源氏自身が連れ出し、おのれの目の前でその女が死んでしまっといっような異常な事件があるのですが、これを誰にもわからぬような手段を講じ二十年近くも秘密にし通すといっような話があります。これは源氏十七歳の時のことですが、十八歳のころ継母である藤壺の女御との間にあんな様な事件があり、十九歳の時にはその秘密の子供が生まれています。そういう秘密事件を若い時に起しながら、その秘密が全然自分の経験以外には洩れないようにじっ胸に堪えているといっ

生活を送っていた人物、これが光源氏だったのです。もちろん源氏物語の全体の筋としては、源氏はいろんなことがあった後、それこそ苦難試練を乗り越えた晩年の源氏は、文字通り位人臣をきわめ栄耀栄華の幸福の絶頂を味わうといっ風に物語はなってゆきます。そしてこの幸福な晩年に不図暗い影をさすのが、前にいっように晩年の妻女三の宮の柏木との不義といっ、源氏にとって因果応報とも言える事件なのですが、しかもこれを源氏は自己の胸の中で全くの秘密であり宿命であるとして自ら解決してゆきます。三の宮と柏木とのことを知った源氏は、当の二人を一言もなじったり面詰したりはしないで誰にも言わさずじーっと耐えている。しかもそれを断じて許さない。その証拠、つまり女三の宮と柏木の不義の証拠を握ってからは直接に手を下しこししないが、暗然たる凝視と冷然たる態度で周章狼狽する二人を心理的に強圧するわけです。——実はここに私の言っもう一方の「か細い洞察力」の問題があるのですが、これはもう言っている余裕がありません。それで、ともかくこっのことですから源氏に知られた柏木と三の宮の二人の方はたまらない。そして遂には柏木は病気になるて世を去り、三の宮は落飾する、つまり世を捨てて尼になってしまっといっ運命の必然を迎えるといっことになります。

ですから、こっした面にも光源氏といっ人物の、何と言っましょうか、やっぱり図太いといっか、池田弥三郎さんなどのいっ、し太いといっか陰影の深いといっか、冷徹な一個の男性の強い心が見えるので、さまざまな女性たちにゆたかな愛情をかたむけた光源氏は、だからといってけっして温和で円満一方の人がらではなかつたといっことです。

藤壺の女御とのあやまちは深く心に隠したまま、とうとうその秘密が少しも世間に洩れることがないように守り通してしまっました。けれども自分の身にかかわる密通事件には、知った以上当事者を許しはしませんでした。まことに冷厳とでもいっべき処置をきっぱりと下しているといっ言っ方も出来るだと思っます。ですからこの行動は、光源氏がけっしてそこらにやたらにいるようにやけた浮薄な男などではないことをはっきりと示しています。さらに、大きな秘密を一生口にするこなく厳然と生きるといっおそろしいまでの強い意志の人物です。そういう強い意志を光源氏はいやでも鍛えていかなければならなかつた、そういう生き方をしなければならなかつたのです。くどく繰り返すようですが、光源氏といっども、生れながらにして完成されていたわけではありません。若い日に同じような失敗をくりかえすあたりは、きわめて平凡でさえあります。然しその失敗の一つ一つの処理にあっって強い心が鍛えられていっったようです。光源氏の一生はこっして謂わば自分自身の力によって築

き上げられたものです。孫引きですが、アンドレ=ジットの「背徳者」という作品の中に、「幸福は出来合いではだめだ、あつらえでなければならぬ」という言葉があったのだというのを覚えています。源氏物語の光源氏の場合も、この出来合いの幸福を拾ったのでも与えられたのでもありません。いわば「あつらえの幸福」を自分の手でしっかりと握ったのだといえましょう。そしてそれだからこそ、光源氏の一生、その生き方は今日の世まで語り伝えるに足りる人生であり、それだからこそその人生を描き上げた源氏物語が今日なお価値の高い物語であると言えるのだと思います。

どうも与えられた時間をいささか越えてしまい、その上また予想どおり勝手気ままなこじつけ話に終ることになりました。さらに「図太い神経と、か細い洞察力」の洞察力と源氏物語の関係はやはり殆ど言い及ぶことが出来ませんでした。が、まあこんな話でも総会の座興がわ

りとお考えいただくよりほかに、私としましては、ご清聴いただけましたことを、大へん光栄に思います。失礼いたしました。——拍手——

(60. 10. 27. 総会会場、於沼津ブケ東海)
〔なお、当日出席していた東京支部長浜田建明君の示唆要請により、その後61年7月13日の沼津高専同窓会東京支部総会(於虎ノ門パストラル《東京農林年金会館》)記念講演として、ほぼ同題同内容のものを再度実施したことを念のため付記します。結言に曰く——「…こんな話でも、東京支部総会へ、退官直後に出られた私個人の記念となぐさみとお考えいただきたく、ご清聴下さいましたことを大へん光栄に存じます。〕

最後に、これは私の東京支部の皆さんへの退官のおそまきのあいさつですが、私は今後いつまでも、沼津高専ゆえの、皆さんとのこの『合縁奇縁』を大切にしていきたいと思います。どうも失礼いたしました。〕以上〕

同窓会創立20周年記念特集

沼津高専さまがわり

(1) 前書き

同窓会の諸兄、ひさしぶりです。今年始めて、しかも創立20周年記念号に投稿させて戴けることは、大変光栄に思います。又小生も62年3月末日で、リタイヤすることになり、再出発の時にも当たることは、感慨の一入深い思いが致します。

考えれば21年前、第一期の会長木ノ内倫弘君と2人で、当時の校長土井先生のお宅へ参上し、機械科の岸岡先生の御指導で作成された、同窓会規約を御覧願ひ、同窓会設立認可を戴き、併せて事務局の場所を当分校内借用することの許可を戴きました、寒い夜で、奥様の手作りのスキ焼で、夜の更けるのを忘れて、話込んだ事を思い出します。

それから20年、今年の8月30日初めて神奈川県西湘地区の支部親睦会に参列させて頂きました。この24年間、学生主事2回、教務主事2回、合せて13年、情報処理教育センター長、電気科主任と、とうとう学級担任は最初の一年だけ、諸君との接触の薄かった小生ですので、大喜びで参加させて頂きました。その時の学校の現況報告が大変喜ばれましたとの、支部長、栢沼昭夫氏のお話もあり、当日参加の本部役員の御賛同もあり、未筆ですが、拙分を投稿した次第です。

(2) 変わりざま

a 学科について

創設当初はMが2級Eが1級の2科3学級でしたが、昭和41年度より、Cを増学科し、61年度より、D(電子制御科)を増学科し、合計4学科5級、一学年200名、総学生定員(予定)1000名の学校となりました。現在は年度更新中で、学生数は883名です。



新設された電子制御工学科1年の教室

電気工学科 佐々木 俊 夫

b 校名変更について

高専制度の創立法文化の時点、文部省は国会に対して、専科大学の名称で上程しましたが、某方面の反対があり、高等教育機関でありながら大学の文字を使用できませんでした。社会的要望から、高専と書き替えて発足せざるを得ませんでした。

25年程の年月を経て、教育実績と、卒業生諸君の努力に対する評価を、校長協会、並びに現校長協会の慶井校長の御尽力により、名称変更の期待が高まっています。勿論名称は専科大学で、近年中に実現すると思われています。

c 建物について

相対的に見ましょう。第一図は昭和39年の本校配置図です。第二図は現在の配置図です。敷地は新寮の部分が2,800坪を昭和43年度増加し、合計、現在27,300坪で大変小さな高専です。建物の建坪15,002㎡、延べ床面積28,056㎡が現在の建物で、39年度の去々3,350㎡、延べ7,514㎡と比べると、約5倍の増加です。しかも来年から電子制御科の教室が建築に掛ります。個々の建物について少し補足します。

① 第2体育館

雨でも降ればラッシュになった旧体育館だったが、昭和54年度、第2体育館が完成しました。体育授業が効率的に運用され、インドア・スポーツのバスケ、バレー、卓球等のクラブ活動も活発になりました。

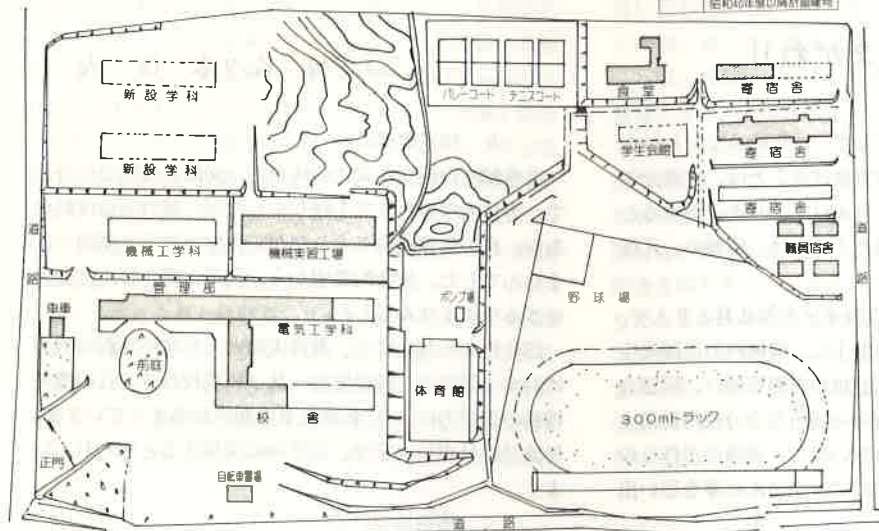
殆どの学校行事は入学式から卒業式まで、新しい第2体育館で、爽快に挙行されます。



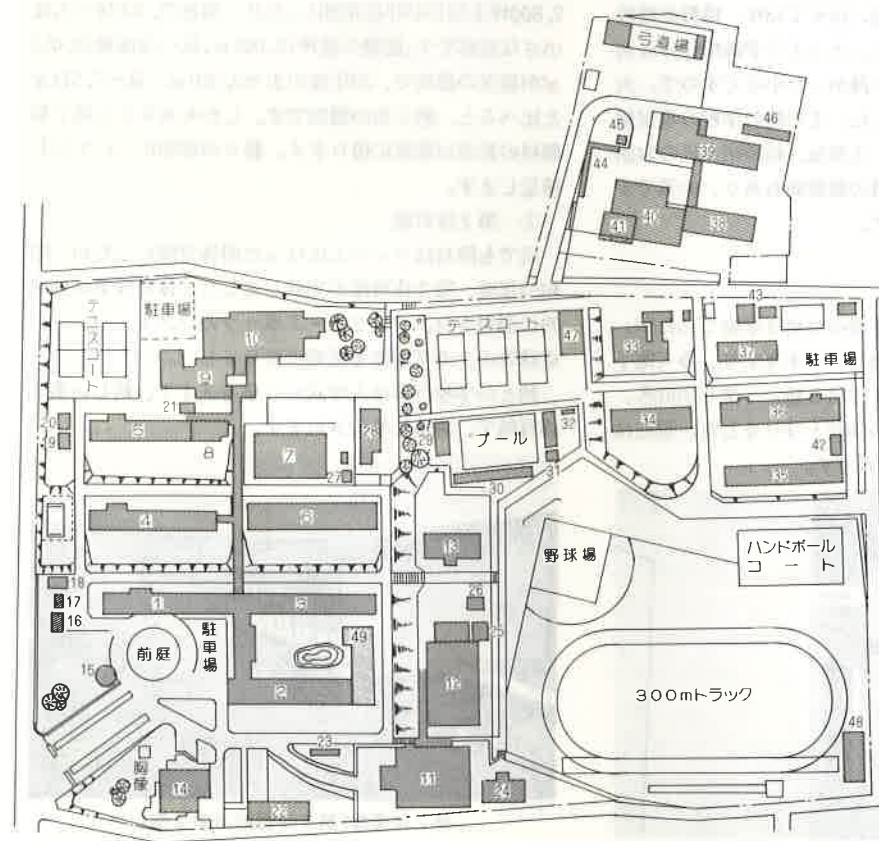
第2体育館(第1体育館の向う側)

② 尚友会館

学生会発足の頃から、学生の福利厚生施設として学生



第1図 昭和39年度配置図



第2図 昭和61年度配置図

- | | | | |
|----|---|---|---|
| 1 | 管 | 理 | 棟 |
| 2 | 第 | 一 | 講 |
| 3 | 電 | 機 | 工 |
| 4 | 機 | 械 | 工 |
| 5 | 工 | 業 | 化 |
| 6 | 第 | 一 | 機 |
| 7 | 第 | 二 | 機 |
| 8 | 第 | 二 | 講 |
| 9 | 情 | 報 | 処 |
| 10 | 図 | 書 | 館 |
| 11 | 第 | 二 | 体 |
| 12 | 第 | 一 | 体 |
| 13 | 武 | 道 | 館 |
| 14 | 尚 | 友 | 会 |
| 15 | 守 | 衛 | 所 |
| 16 | 車 | 庫 | 庫 |
| 17 | 倉 | 庫 | 庫 |
| 18 | 車 | 庫 | 庫 |
| 19 | 危 | 険 | 物 |
| 20 | 倉 | 庫 | 庫 |
| 21 | 変 | 電 | 室 |
| 22 | 才 | 一 | ト |
| 23 | 自 | 転 | 車 |
| 24 | 体 | 育 | 器 |
| 25 | 体 | 育 | 教 |
| 26 | ポ | ン | プ |
| 27 | 油 | 庫 | 庫 |
| 28 | 課 | 外 | 活 |
| 29 | 器 | 具 | 共 |
| 30 | 運 | 動 | 場 |
| 31 | 女 | 子 | 学 |
| 32 | プ | ー | ル |
| 33 | 学 | 寮 | 寮 |
| 34 | 学 | 寮 | 寮 |
| 35 | 学 | 寮 | 寮 |
| 36 | 学 | 寮 | 寮 |
| 37 | 学 | 寮 | 寮 |
| 38 | 学 | 寮 | 寮 |
| 39 | 学 | 寮 | 寮 |
| 40 | 学 | 寮 | 寮 |
| 41 | 合 | 宿 | 研 |
| 42 | ポ | イ | ラ |
| 43 | 洗 | 濯 | 場 |
| 44 | 自 | 転 | 車 |
| 45 | 学 | 寮 | 寮 |
| 46 | 自 | 転 | 車 |
| 47 | ポ | イ | ラ |
| 48 | 生 | 活 | 排 |
| 49 | 電 | 子 | 制 |

会館の要望が高かったのですが、予算の関係で出来ませんでした。しかし、諸君の社会での活躍や、体育大会の高揚等から、是非必要の声が高まり、昭和58年度建物が完成し、名称の公募した結果、尚友会館と命名され、一階には学生食堂と理髪店、購買部とロビー、二階には、課外活動共用室、研修室、保健室、学生相談室を置き、学生の福利厚生に当たっています。外壁はモザイク・タイル（鏡面）で4季折々の周囲の色を反射して、モダンな建物です。



尚友会館

③ 運動場付属施設（クラブ室）

校地の所々に存在した、バラックのクラブ室、床をしろありの食った、冬のクラブ活動が終了と真暗で乾電池に豆電球で照明した、なつかしのクラブ室も昭和49年に美しいコンクリート建のクラブ室がシャワー付12室完成しました。



新築された部室

④ 弓道場

昭和41年度、柔剣道の教室として、武道館（慶井校長により錬心館と命名された）が完成していましたが新たに、昭和53年度弓道場が新寮の北に建設されました。弓道クラブは道場のお影で大活躍です。



食堂ウラの弓道場

⑤ 高学年棟

在来は一般棟に低学年と高学年の学級が混在していたが、卒研や合同講義の関係で、4年5年はまとめた方が、生活指導にも便と考えて、第2図の8に高学年用教室を全部あつめた高学年棟を、昭和56年度、化学棟に続いて東側に増設しました。



増築された工業化学科棟と高学年棟

⑥ 女子寮

女子学生は、化学科に多かったのですが、その後女子学生の数は増加の一方で、現在41名の女子学生が在学しています。一級定員の40名を超えたので、60年度から、従来の明峰寮を女子学生専用にしました。現在低学年の女子学生23名と3年生の指導女子学生1名計24名が在寮しています。



女子学生も増えた
（現在41名）



女子寮（明峰寮）

⑦ 情報処理教育センター

昭和46年、OKITAC4500電算機の導入にともなって、電算機室が完成し、48年には演習室が51年にはオンライン室が増築され、全国高専の中に群馬と沼津と2つだけの情報処理教育センターに名前が変りました。内容的にも、長年のOKITAC4500の使用は、時代にも、機能的にも劣って来ましたので、昭和56年度、外国機種で教育用コンピュータとして名の通った、VAX-11/750に更新され、本校の情報処理教育に貢献しています。32 bitマシンなので演算速度が早く、他高専から、羨ましがられています。



OKITAC4500からDEC社のVAX II/750に変わった。



端末に向かってがんばっている。

d 現在までの定年退官の先生方

今までに定年退官された先生は以下です。

- 一般学科 市川、岡田、朝日奈、近藤
- 機械工学科 組岡、喜多、木戸、伊吹 (松平、関)
- 電気 " 川合、柳瀬、清水 (佐々木)
- 化学 " 村松、川松、米崎、富田

e 大学編入学者

樋口校長の御尽力により、開校された静大の三学年編入制度は、その後益々、好転して多くの大学が門口を開いて下さって、現在多数の卒業生が進学し、修士を卒えて、社会で活躍中です。博士に進む人もあるようです。160人の年度卒業生の約1/5、平均30名余りがコンスタントに大学に編入学し、最近では東京大学への編入生も増加の傾向です。

以上以外に書かねばならぬ事が多々にあると思いますが、あまり長くなりますので、これで締めくくらせていただきます。

座談会

「同窓会の昨日、今日、明日」

同窓会創立20周年を記念して昭和61年12月7日、暮のあわただしい中を同窓会歴代会長や学校出身の顧問の先生方にお集りいただき、座談会を開催することができました。20年前の創立時の苦労話や同窓会についての考え等を本音で語っていただきました。司会は現副会長の山本が行いました。

出席者

- 細井道泰 (M2・2代目会長)
- 小池洋三 (E3・3代目会長)
- 鞠子 誠 (M5・5代目会長)
- 伊達忠昭 (M1・6代目会長)
- 仁科和晴 (M2・9代目会長)
- 漆畑 豊 (E1・10代目会長)
- 諏訪部豊 (E9・現会長)
- 山本克之 (M17・現副会長)
- 平松雅彦 (M12・現事務長)
- 小池龍三 (M1・理事)
- 柳下福蔵 (M1・顧問)
- 西田友久 (M12・顧問)
- 井上 聡 (M14・顧問)

昭和61年12月7日 於沼津江戸沢



山本 それではそろそろ始めさせていただきます。一応今日大体どんな風に進めようかなということなんですけど、まず同窓会が出来た頃の時から始めて、学校の20周年記念の時の苦労話とか、顧問の先生との間のいろいろなエピソード、その辺を中心に話していただいて、その後、これから同窓会がどんな風になって行くのか？またどんな風になって行ったらいいのか？その辺のこの予想を含めてみなさんに話していただきたいと思います。

ではまず最初にみなさん今日来られているので大体ひと言ずつ苦労話みたいなものを話していただきます。始

めに今日出席されている歴代会長の中で最も古い細井さん、お願いします。



細井 そうね、始めね同窓会長を選ぶってのはとにかく近くにいる奴、学校の近くにいる奴、そのどうでもいい奴ね。(笑) これはその何て言うかな、企業に忠誠を誓ってない奴、そういう雑用でも何でもやってくれる奴、こいつは先行的にも見込みがない。(笑) そういうような奴が決まったんだよなあ始めに。(笑) いや決まっていたって、いやもおもうなかったみたいだよ。

山本 一番最初こういう話を出されたってのは？

細井 いや学校にいる時に、まだ卒業してない前に、うん決まっちゃったよね。



柳下 たしかね、ぼくらが卒業する時にだれか先生があのこと心配してくれて、同窓会を作ったらどうかということだれかが相談を受けて、それで木ノ内がやってくれたんじゃないかな。たしかそう聞いているんですけどね。

細井 そう、だからみんな周りの人に役を振り分けた。ていうような感じよね。

柳下 そうそう。

細井 それで初めは何もない。

柳下 そうね。でも1回目は何かやったでしょう。会則も作ったし。その時あなた出られたでしょう。その時のようす話してよ。どんなようすだったか。(笑)

細井 どんなようすもなにも、大分前のことで、それほど一所懸命やったわけでもないから忘れちゃったけど、あの時は決まっていたよね、会則は。ただそれにちょっと手直ししたようなことはあるかもしれないけれど。

小池 会則っていったい誰がつくったんだっけか？



漆畑 聞いた話だとね、卒業する前に、こういうもの、せつかくこういうものもがもやもやになっちゃああれだから、同窓会組織、ようするに通常小学校、中学校って言うね同級会

員じゃなくて同窓会っていう組織立ったものにすべきだという発想をもって草案を作った。そういうことでまあある程度ルールはそういう意味で作られていった。それで木ノ内がなったんじゃないかな。それで静岡でやった

んだよな、発会式を。その頃、だから会則の草案的なものってのはめんどろ見のいい先生がいたからね。

細井 だから2回目の総会やった時には、まああれ1年毎でしたものね、毎年やってた。その時は。まあ毎年じゃという話もあったけどまあやろうということで、何でも皆の意見を聞かなきゃいけないというような形じゃ、ちょっと動きがとれないというようなことで、少し手直した記憶はありますね。それでそれを総会に図ったことは図ったですね。2回目の時に。ほんとうに正直に言って、そんなにその時は、同窓会っていうものがどう言う性格のもので、どういう風にかかわってくるかというのかわからないわけですね。小僧がやっていることだから。まだ実感はなんにもないわけですね。ただ痛感したのは、住所がわからないと、みんなあちこちに飛んじゃってて、連絡しようにもできない。だから一番やりたかったのはまあ不完全に終わっちゃったんですけども名簿の住所の把握って言うんですかね、それをやりたかったんですね。送ったって帰って来ちまえば話にならないから。実際始めのころはみんな遠く行っちゃってて、あとあっち行き、こっち行きで、まあ定まっていなかったね。だから今みたいに、まあ人数が増えてきていけば、その内の何人かは集まるわけだから、決まっている奴が。住所の内ははっきりしている奴が。だけど、その当時はほんとうに少なかったものね。教室でやったんだよなあ。ほんとうに30人かそこらじゃなかったのかな、総会って。

小池(洋) 最初の会則がさあ、会員の2/3だからで決定するとか書いてあって、とても足りないんで出席者のいくつかに変えようっていったのを、よく覚えていますよ。

山本 総会ってのは、1年目でやったんですか。

小池(洋) その辺が定かではない。

細井 だから、1年目はだからもう、1期の方に聞かないとわからない。

漆畑 卒業して第1回の集まりを総会って数えるのかなあ？

細井 われわれのころは、コピーなんてないから、ガリ版で刷って、それで総会の資料を作ったんですよ。

山本 木ノ内さんは2年やったんですか。

小池(洋) そうです。木ノ内さんは2年やったんです。

細井 だからやっぱり、自分がやってみればわかるんだけど、協力なんてないわけね。まあ人数も少ないし、みんなも就職したばかりでそんな余裕がないから。そいでその当時はまあ学校とのそんなにどうこうないみたい。ともかく同窓会っていうそのものがちゃんとしたものじゃない。と言うと語弊があるけれども、海のものとも山のものともつかない状態だったから。会員数も少ないし、ほんとうに数えるほど。そいで近くに居る人はほ

んど少ない。

山本 かなりそのころからバラバラに散ってましたか？卒業生っていうのは。

細井 やあだからほとんど、あっちこっち全国にまたがっていたね。

山本 ほんとにもう連絡つけようにもつかないっていうのは、人の口伝えに、あいつがああに居るとかっていう感じになるんですよ。

細井 正直に言ってそこまでの活動は出来なかったわけですね。

山本 先程名簿っていうかそういうような話があったんですけど、じゃあ具体的に会員名簿っていうか、その辺を具体的にまとめだしたっていうと、いつごろになるんですか？

伊達 白井が会長の時じゃないかなあ。おれが2年間やって、その次白井に渡して、白井が1年目の時につくったんだよね。

山本 白井さんが7代ですから、もう10年かそのぐらい前？

伊達 たしか同窓会の10年目かなあ？

細井 一番初めの？

伊達 ちゃんとした名簿を作ったのはね。白井が、会長だった時だね。

細井 あれはでもね、白いところがありましたよね。ただ名前だけとか。それからぜんぜん連絡がつかない人が載ってるとか。

山本 かなりそう言うところがありました？

伊達 あれも十分調べたんだよねみんなね。クラス別に見るようにならね。酔っぱらって電話でね。そうとうね。友達伝いに聞いてもらってりして。

仁科 なんかもみんな寮に住んでたりしてずいぶん動かしからね。

山本 そうですね。

伊達 まあ、いくら聞いてもわかんないっていうのが、けっこういるんだよね。だれに聞いても、あいつはどこ行ったかわからないって言う奴。

山本 何とか連絡ついたころ、またどこかに移っちゃうっていう……。

細井 まあ、そんな感じですよ。

山本 ええと3代会長の小池さん、何か当時のころの思い出とか、何かお願いします。

小池(洋) 私が会長の時は、まだ会社入ったばかりで、1年の内200日ぐらい出張してるときだったんですよ。それだもんでもうね、ほんとうに何もできなかったですよ。もう会社でも一番の下っぱで、走りまわ



っている真最中に。私は非常に運が悪かったですね。細井さんにおどかされて会長にさせられちゃったんですから。(笑)あの頃同級生でこの辺に住んでいたのは3人位でした。今みたいに会社入って何年かした人がやってるってのは違っていましたね。みんな全国に散らばっていたし、ボクの同級生でこの時に住所がわかっていたってのはほとんどなかったですね。

細井 だからあの頃は何をやらいいのか分からなかったというのが本音でしょうね。

漆畑 全国に散らばってしまうのは学校の性格上仕方ないことだけど、名簿がある程度しっかりしていれば同窓会の目的はそれなりに達している訳だね。

細井 今は何かを郵送するたびに住所変更カードがしょしょに送られて来るでしょう。でも逆に言うとなればその住所に居るから届く訳でしょう？

諏訪部 そうです。だけど引越する可能性のある人はあのカードを保管しておいて住所が変わったら同窓会に送ってもらいたいんです。

細井 そういう風に利用されればいいんだけど、ポイと捨てられちゃあこまるね。(笑)

山本 最近は郵便局に届けを出しておけば1年間は新住所に届けてくれますよ。

諏訪部 何かを郵送するたびにドサッと住所不明で返って来るんですよ。

細井 時々住所不明者リストを出すでしょう。あれはいいことだと思いますよ。

山本 そうですね。実は私もあれに名前が載ったことがあったんですよ。(笑)ちゃんとカードは出したんですけどね。だから自分が住所不明者になっているってことを本人も知らないってことはある訳ですよ。(笑)ああいうリストを出せば回りの人間がその人に住所不明者だということを教えてくれるということが期待できますね。

小池(龍) しかしさ、誰に聞いても分からない奴っているな。(笑)

山本 5代会長の鞠子さん頃はどうかだったんでしょうか？

鞠子 歴代会長を見てもらえば分かるんですが私までなんですよ、1期、2期、3期、4期、5期と会長が来たのは。(笑)会社に入って1年目に副会長をやらされて、次の年に会長を押しつけられました。これはたしか当時はそういうシステムになっていたんです。任期も会則で1年ずつということでした。まあはっきり言って私の時は大分学校にお世話になりました。まず金がなかったですね、同窓会費が。卒業生のみなさん貧乏していたのかどうか知らないですけど会費がほとんど入ってなかったですね。(笑)それで市川先生なんか大分

面倒を見てもらいまして、徹文を発送して、とにかく会費集めに1年位を費やしたんじゃないかなって記憶があります。その時からですかね卒業する時に会費を集めてしまおうという風に決めたのは。卒業してしまうとなかなか会費を納めてくれないですから。それまで年会費は1000円位で、終身会費はたしかその時5000円に決めたと思います。

それから理事が当時集まっても5人か6人位だったですね。発送作業はほとんど手書きだったんで理事会はほとんど発送作業だったですね。だから事務長なんかも気をつけてコーラとかお菓子なんかを買ってきてくれたという記憶がありますね。なんかこう細々とやっていたという感じですね。2年間いい経験をしたという感じですね。それ以後あまり協力していないんで申し訳ないんですけど。(笑)

山本 ええ、伊達さんは？

伊達 オレの話する前にどうして5期の鞠子君から1期にもどったんだかさあ、その辺を話してもらいたいよ。(笑)



鞠子 ようするに会社に入って1年目とか2年目だとなかなか1期生、2期生に声を掛けられないんですよ。そういう面もあるしやっぱり巣立ったばかりで右も左も分からない状態ですからね。そういう人が会長とかをやるよりも、同窓会も大きくなることだしある程度経験のある人によってもらったほうがいいんじゃないかということで1期生に戻った、というとおかしいんですけどね。そういういきさつがあったんですよ。

細井 そこへちょうど伊達さんが帰ってきた。



伊達 オレが帰ってきてそんなに経ってなかった時なんだよね。柳下君がね、1期があつまれてんでね。あの時この辺に20人位居たのかな。それで跡部君の家に集まってね、誰かやれてることになって、その時一番逃げるのが下手だったのかな。(笑)結局やるはめになっちゃって。それまで同窓会のことにはノータッチでいたのが急になっちゃって。でもその時は島村君と跡部君と3人で、気安い仲間だったからやってこれたんですね。まああの時はずいぶんいろんなことやっていて、しょっちゅう集まっていたという気がしますね。で、名簿をつくらなきゃだめだということで、実際発行したのは次の白井君の時だったんだけど、住所の調査をずいぶんやったという記憶がありますね。各クラスの理事を中心にしてクラス別に

やってくれという形でやりましたね。総会であがっちゃったなんて記憶もありましたね。それまで人前に立つなんてことがあまりなかったもんでね。でも今になってみるとああいう経験をしたことがずいぶん役に立っているという気がしますね。それから東芝機械なんかに行くとはほとんどの人が理事や三役やってますんで知らない人がいないなんて感じになりましたね。

山本 伊達さんの頃は総会はどこでやったんですか？

伊達 総会はやっぱり寮の食堂でやったよ。

山本 寮の食堂でやりはじめたのはいつ頃からなんですか？

伊達 鞠子君の頃からじゃないかったかな？

鞠子 そうですね。

山本 じゃあ続まして仁科さん。この頃ですと学校の20周年という話が出始めた頃ですね。



仁科 そうですね。まあ伊達さんの後に白井さんと望月君がやって、それで私ということになったんですが、私の時は学校の20周年の準備ということになったもんですから20周年誌の関係とかにからんで20周年の実行委員会をつくるって話になったりしまして、まあその実行委員長が漆畑さんになっちゃったのが漆畑さんとしても致命的な流れになっちゃったような形ですけど。(笑)思い出にあるのは、名簿を作る事業を始めたんだけど私の時にはでききらなくて、漆畑さんが会長の時に名簿発行委員会ってのができて、私もその名簿をまとめあげてを一生懸命やってきたってこと。それから20周年の実行委員会の中で同窓会の分担金をどうするかということになって、200万円位を出せなくてどうするんだということになってそれでまあ200万円出しましょうとなった訳で。その後、次の会長をどうするかということになった段階で、漆畑さんが実行委員長だった訳ですから、実行委員長が会長になるのが自然の流れだと私も考えて、これはもうこうなるしかないということで強くお願いして、漆畑さんも「しまった」と思ったかどうか分からないんですけど会長になってもらって20周年は盛大にやれたという形ですね。

山本 という訳で、漆畑さんいかがでしょうか？

漆畑 いかがも何もやってないんですね。やってないのは会長くらい楽な仕事はないんですね。(笑)だってさ命令できるんだからさ。はいあれやんなさい、これやんなさいって決めてしまえばあとやってるのは他の連中ですね。一生懸命やってくれる。という訳で負担じゃなかった。ただ何かをまとめて行かなければならないという責任はあったんでそういった意味で大分強引なこと

をしてその仁科とか柘植なんかに召集をかけてやってきた。という訳でいわば作られた会長であってね。会長になる理由がいわゆる20周年をやるってことでその前の仁科達が準備して、それで同窓会として協賛する以上、名前を連ねなければならぬ。で、そこでまさか11期とか12期とかという訳にはいかない。そこで1期しかありようがない。ということでたまたま落第しないで1期で卒業したというのでそうただで。あと20周年云々ということではようするに金集めに奔走ということで、思い出は金集めだけだと思うんだけど。あと体良く逃げたんですね。20周年やったからばくの代では同窓会誌を発行しなかった。同窓会誌出してないってのはばくの代だけじゃないかな。20周年を一生懸命やったから同窓会誌はやめようってのを理事会で誘導尋問的に決めて、それであと名簿ってのは20周年でいっしょに出そうとしたんだけど住所の集まりが非常に悪くて、ばくはその時、名簿をつくるんだったら住所不明があってはまかりならぬとハッパをくれたんだけど完全な名簿じゃなかったんでみんなを集めて調べ直した。そういった意味では会長は命令していればいい訳で、楽な仕事だった。だから会長を引き受ける時にみんな言われたと思うんだけど楽だからやんなさい、楽だからやんなさいってね。(笑)楽なんですよ。建て前としてはね。(笑)まあそんなことかな。あと会計ってのは影の会計がいたんでね、坂井ってのがいたんであいつにやらしとけばよかったですね。でもこういうのは好きじゃないと出来ないよね。と思いますよ。それでその後、次の会長を選ぶ時にね、口実がなくなっちゃったんですよ20周年もやっちゃったし、名簿も出しちゃったし。それで柘植を泣き落とすには大分苦労しましたけど、まあさっきだれかがいみじくも言ったけど断わるのが下手だったということで柘植になった訳ですね。あいつ聞いたらおこるだろうけど。(笑)ばくは20周年とか名簿をやってみて、何をやるにも所在をはっきりしておくのが大事だということで、名簿をメンテしていくのが同窓会の一番の仕事じゃないかと思えますけどね。ただ1期となると会社の方もいそがしいし、思うように会合にも出れない。集会やりたくても自分の都合で召集をかけられないという点で苦労しましたね。もうひとつ女房におこられたのが、会長やってると電話料がかさむということね。(笑)ようするに名簿とかなんかやってるといろいろ問い合わせの電話を東京とか大阪とか北海道にかけると。ということで電話料が大分かかってしまったということね。まあただ20周年の時には電話料として各理事にたしか1万円だったと思うけど一律渡したと思ったな。もちろんみんなそれでは足りなかったと思うけど。

山本 ありがとうございます。まだ他にもいろいろ

あるかとは思いますが時間の都合で次の話題に移らせてもらいます。

来年同窓会も20周年になる訳ですし、同窓会の三役も大分若返った訳ですが、これからこの同窓会ってのをどのようにやって行かなくてはならないかってのをみなさん考えをお持ちだと思いますので、その辺のことを話していただきたいんですけど。特に人数的に今後どんどん増えて行く訳ですとそうなる本部だけでは全部を把握できない。となると支部の役割が非常に重要になって行く訳ですが、その辺も含めてどうでしょうか？

細井 同窓会の活動というのは本部がどうのこうのやってもなんなんで、やっぱり活動といっても普段から顔を知って名前を知って、それで何かをいっしょにやったり飲みに行ったりした時に何か出て来るものだと思うんですよ。だから組織作り云々というそんな大きな物でなくてもみんなが顔を合わせるができる範囲で作って行かなくてはならないと思いますよ。今の場合だともう本部でこれをやるんだということで全会員に通知をくれる。そうするとその事務量だけでも相当なものになる。それに同窓会ってのに全然出てない人にとってみれば同窓会とは何かと、そんなものあってもなくても関係ないという風な実感のほうが強いんじゃないかと思うんですよ。私は同一企業において先輩、後輩とかいう関係になったことがないんで分らないんですが、やっぱり全然知らない奴でもあそこを出たということになると、「オッそうか」ということになるんじゃないかと思うんですよ。だからこれからみんながそんな意識に目覚めるためにはまず支部を作って、やるということが一番いいと思うんですよ。その場合一番ネックになるのが、いったいだれが音頭を取るかということですね。それができるのは1期の方々なんですね。それをおねがしたい。1期生でないとしてもどうしても言いづらいことがあるんじゃないかな。どうでしょうか？

伊達 たしかにさっきの漆畑君みたいに命令するだけで済ませられる人はいいと思うんですけど。(笑)なかなか人によって違うからね。自分がやった時も自分が中心になって三役が中心になって細かいことまでみんなやらなきゃならなかった。あの時はそんな状態だった。そういう状態でまたやろうとするととてもそんな負担には耐えられないしね。本当に漆畑が言ったみたいにトップにいて、別に事務局みたいなのがあってね、そこで実務面のことみんなやってくれるってのならいいけど、いきなり1期でこう全部ね、方針出してやんなさいって形を急にやれて言うすとすごい負担に感じるんですよ。やるんだしたら実際の代表になる人と、普段の実務面をやる人を平行してやらないとちょっとむづかしいと思いますよ。

細井 でもひとつの企業の中にはあるんでしょう。いっしょになって飲みに行くとか。そういうのをすこしずつ広げていったらどうでしょうか。

伊達 うん、うちの会社だと今6、7人ですかね卒業生がね。そうすると何かあると1期が一番上だから表に出るけれど、普段の飲み会やるって時は一番若いのが幹事をやるとかね。そういう風に小まわりきかせて動いてくれる人がいれば、それでもいいんですけどね。それを大きくしたような形になればいいんじゃないかなって感じはしますね。

細井 そうですね。だって正直言って来年の卒業生が来たって全然知らないもんね。そうするとたぶん一生のうちでも大半の人を知らないですぞすと思うよ。

山本 そうですね。

伊達 最初の頃、オレが会長やってた頃大変に思ったのはね、理事に連絡するってことね。あれがすごい大変なんだよね。クラスに必ずひとりかふたりは置きたいんだけどなかなかうまくいかない。そこでまず三役に何回も電話する訳ね。そこで3人の都合がついた上で、理事に連絡する訳ね。そういう連絡がすごい負担だったね。だからそういうことをだれか別の係がやってくれると大分楽になると思うね。それは今の三役もそうじゃないのかな？



平松 今は小池(龍)さんのところ(JC)に名簿なんか全部インプットされていて、一本電話かファックス入れれば理事全員に連絡の葉書が発送されるシステムになったのでかつてのように理事は雑用係とい

うことはなくなりましたね。

諏訪部 むしろ理事会を開く名目がなくなってしまったような感じですね。

小池(龍) もともと同窓会ってのは互助会とか親睦団体みたいなもので、ようするに横のつながりはつけやすいけど縦のつながりをつけるのはむづかしいんだよ。だから現実と同窓生で酒なんかよくいっしょに飲む奴がいるんだけど同窓会なんか1回も顔を出したことがない。

細井 それをつなげるのが理事の仕事なんじゃないか。

山本 現状では理事も100人以上いるんですよ。理事の名簿を見ると「わあすごいなあ」なんて思うんですよ。(笑)だけど先ほども鞠子さんから話があったとおり理事の中でもやはり何年間が空いちゅうと理事会になかなか出てこれないってのがあると思うんですよ。しかも理事のほとんどが終身理事ってことになっちゃってるから大変だと思うんですよ。これからも毎年理事は増えて行く訳ですし、理事ってのはとても大事だと思うんですが、どうしたらもっと集まってもらえるように

なるんでしょうか？

伊達 酒じゃないかね。(笑)

柳下 名前だけでもあったほうがいいんじゃないかなって思うんだよね。と言うのは名簿を作る時のクラスのまとめ役ね。それはすごく効を奏している訳ね、今までのやり方で。だから……今は非常にうまくこうみなさん自分で判断して、出たりこう自然に遠慮したりという具合になってるんじゃないんですか？(笑) ずっと抜けれないのが学校関係でございまして。(笑)

小池(龍) 学校関係者が中心になってやってるんじゃないのか。(笑)

山本 大分増えましたからね。



諏訪部 私の経験から言うと私がちょうど卒業した時は伊達さんが会長だったんですね。それで初めの頃はまじめに出ていたんですけどだんだんやっぱり同窓会ってのは続けて出るほど魅力はないって言うか、(笑) 申し訳ないんですけどだんだん出なくなっちゃって、それで20周年の頃はちょうど東京へ転勤になっちゃって全然協力できなくて、それで漆畑さんが会長の時に帰って来たんで、これじゃまずいから少しは出ようかなって思っただけで出はじめたんですね。出はじめた時にはやっぱりかなりの勇気が必要だったようですね。でもだれもとがめはないし、ある時期の協力できる時にちょこっと2年とか3年とか協力できればそれだけでも十分じゃないかなって私は思うんですけどね。

柳下 何かさ、なんかやる時に結集できる体制にしておけばいいんじゃないの。学校が20周年やった時にあれだけの実績をつくったんでしょ。だからそういう体制になっていけばいいんじゃない。

諏訪部 そうですね。年がら年中、理事会に顔をださなければならぬってことでもないですね。

柳下 それはあまりにも気のどくです。(笑)

話がかわっちゃうけど鞠子が会長やってた頃は毎週理事会だったね。ちょうど学校の10周年の頃で名簿作りだね。図書館の下のロビーを借りてさ。(笑)

小池(龍) 思うんだけど同窓会総会ってのはもっと面白いものにならないかね。例えばゴルフのコンペにしちゃうとかさ。(笑) そうすると同じ趣味の者が集まるからそれだけのつながりってものが出来てくるんだよね。ただこう総会やるから集まれよって言うてもなかなか集まってこないもんね。

柳下 その打開策として前回の総会は市川先生に講演をたのんだんだけど、今後はそれをもっと発展させて知名人を呼ぶとかさ、そういう目玉があるとちょっと集まり

やすくなるんじゃないかな。ただ例えば宮崎緑さんなんかを呼ぼうとすると15万円位かかるらしいんですよ。知名人を呼べるようになったらそれを市民にPRしてもいいんですよ。

小池(龍) でも人数が集まらなるとまずいよ。パラパラだったら悪いしな。(笑)

細井 今は理事の決め方どうしてるの。

西田 結局昔と同じように、近くに住んでいる者、近くの会社に勤める者、そういう者をピックアップして選んでいます。

細井 そうすると遠くに就職した人達はほとんど沈交渉になっちゃうんだな。



西田 そうです。私はもう少し卒業する人に同窓会を理解してもらう場が必要じゃないかなと思うんですよ。私も高専を出て大学に行っていた4年間は全然同窓会が何をやって

ているのか知らなかった訳です。こっちに帰って来て初めて同窓会はたいへんだな、理事は特にたいへんだなと分かったんですね。(笑)

柳下 西田君たちが5年生の時にさ、就職に対する心構えなんか話を聞いたでしょう。あれはもともとは同窓会が主催してやっていたんですよ。それで2、3年して軌道に乗ってから学校側にバトンタッチしたんですよ。今は各学科の主任の先生が同窓会の名簿を見て適当にピックアップしてやってるんですけどね。だからそういうのを上手に利用すれば、会社の話をしてやるついでに同窓会ってのはこうだよって言う話もできると思うんだよね。



井上 卒業式の祝賀会の時に同窓会のPRを強くやったらいいんじゃないですか？

伊達 でも5分かそこいらじゃね。

井上 そうですね、もっと時間がほしいですね。

山本 ええ、まだまだ話題は尽きないようですが、大分時間も経過しましたので、今日はこれくらいでお開きにしたいと思います。貴重な体験談や建設的な御意見をたくさんありがとうございました。今後同窓会に対しての御協力をお願いいたします。本日はどうもありがとうございました。

西湘支部紹介

同窓会本部を支えるのは各地域の日常活動だ！

M1 増田 徳一

★西湘地区同窓会 今だ健在なり！

沼津高専の同窓生諸兄諸姉に告ぐ。神奈川県西湘地区同窓会は今だ健在なり。縁ありし者は、集い来られたし。今から10数年前、愛知や浜松地区に同窓会支部が発足した頃と時を同じくして、神奈川県西湘地区にも同窓会の地域活動が発足しました。他の地区とは違い、正式な支部組織は採らず、同郷の仲間が寄り集まって新年会を開いたのが発端でした。

そして何年か後、愛知や浜松の支部活動が衰微してしまつたような噂を聞き及びましたが、その後の様子は、いかが相成っておりますでしょうか。

その間、我々の西湘地区は、細々ながらもよちよち歩きの活動が続けられ、現在は、年2回の定期的な親睦会を開催するまでの地域活動へと、成長して来ました。そして、今や沼津高専同窓会の地域活動としては、多分、全国で一番充実した活動をしているのではないかと、幹事一同自画自賛している次第です。

そこで、①過去にこの西湘地区の新年会に出席したことはあるが、最近殆ど御無沙汰しているという同郷の志や、②この地域に在住しているが、このような地域活動があるのを知らなかった、あるいは、③知ってはいたが、一度も出席したことがないという、諸兄諸姉にも是非共参加して頂こうと思ひ、この同窓会誌の紙面をお借りして、大いにPRをしたいと考えている次第です。

それでは、この西湘地区の活動の様子を知らない方々や、これから自分達の地区でも、同窓会の支部活動を進めていきたいと考えている諸氏のために、西湘地区同窓会の生い立ちや活動の様子等について、ご紹介を致しましょう。

★西湘地区活動の産声

冒頭に述べましたように、この西湘地区の同窓会活動は、今から10数年前、愛知や浜松の同窓会支部発足と同時に、西湘地区出身の1～5期生を中心として、同郷会の形で新年会が行われたのが最初でした。何分ひと昔以上前のことですので、それが昭和何年だったのか、発起人が誰だったのか、正確なことは、私の既に記憶せぬ処となってしまいました。(誰か覚えていたら、教えて下さい。)ただひとつ覚えているのは、小田原市宮小路の中華『いろは』で行われた、ということだけです。

当時は同窓会員名簿もなく、学生時代に通学電車で顔

を合わせた友達や、寮や下宿で一緒だった仲間の記憶を頼りに、電話や口コミ等で連絡を取り合い、集まって新年会を開いたのが、最初のキッカケでした。参加人数もやっと10人位の小規模なものでした。

★西湘地区の名簿ができた！

そのような状態で、何年間か細々ながらも毎年新年会が開かれ続け、西湘地区出身の卒業生の数もだんだん増え、徐々にではありましたが、参加者の数も多くはなつて来ました。

ところが、卒業生の数が増えて来るに従い、だんだん正確な会員数も把握できなくなり、電話連絡や口コミだけでは、十分な地区活動がしにくい状態になってきました。

そんな折も折、同窓会設立10周年記念行事が母校で開催され、同窓会本部から初めての同窓会名簿が発行されました。そして、この中に載っていた浜松支部の会員名簿に刺激された訳でもありませんが、これを機会に西湘地区でも会員名簿を作ろうということになり、翌年の昭和52年に、M8志村不二男氏の手で、西湘地区初の会員(出身者)名簿が作られました。

それまで全体の人数も十分把握されていなかったこの西湘地区同窓会にとって、それは画期的な出来事でした。

この時の名簿に記載された会員数は、1期生から11期生までの44人でした。その後この名簿を基にして、毎年新しい修正が書き加えられた、手書きの名簿が参加者に配布され続けてきましたが、それも今年の夏からE3栢沼昭夫氏のご尽力により、きれいなワープロ印刷のものが配られるようになりました。

★地区活動の危機——発足させるよりも維持することの方が難しい！

西湘地区独自の名簿も作られ、さて、これで愈々地区活動も本格的に軌道に乗るか、と思われたのですが意外や意外、ここに大きな落とし穴があったのです。なんと、この数年後に西湘地区同窓会活動中断、という重大事を招いてしまったのです。

原因は何だったのでしょか。振り返って色々反省してみると、その要因となるものは、次のいくつかが考えられます。

1. マンネリ化による参加常連者の不参加増大

2. 会員数の増大と参加者の減少という、アンバランスに起因する通信費負担増大による資金難
3. 幹事の人数が1〜2名の上に、若返りという名目で、下級生に幹事を任せ過ぎた等々

この外の要因もあるかもしれませんが、主に上記のような内容が複合されて、数年間に亘る地区活動の中断という最悪事態を生じさせてしまったと考えられます。

★心機一転再出発——再び西湘地区の灯を消すことのないように、の願いを込めて

折角軌道に乗りかけていたかに見えた西湘地区同窓会の活動も、この中断によりすべてが振り出しに戻ってしまいました。

昭和57年の冬に、小生を中心にした新しい幹事を決め、先の反省を基に、「再び西湘地区活動の灯を消すことのないように！」との願いを込めて、一からの再出発をしたのです。幸いにも活動中断前の会員名簿が残っていましたので、これを頼りに会員に連絡を取って、再出発の第一歩として昭和58年の新年会を開くことができました。

しかし、哀しいかな、一度中断してしまったための後遺症で、会員名簿の不備もあり、参加人数が15名前後を一進一退する状況を余儀無くされる有様が暫く続きました。この参加率の低いという状況に伴う通信費等の活動資金難が、我々幹事の悩みの種で、いつ再び中断の危機にみまわれはしないかという不安を抱いての再出発でした。

★活動をより充実させるために

これらの活動の障害となる要因をできるだけ軽減するために、前の反省を基に、次の内容を基本に活動を進めていくことにしました。

1. 幹事は、できるだけ幅広い年齢層から5〜6人を選び、必ず活動の中心となる責任者を決め、各々の役割分担を決める。
2. 常に会員名簿の見直しを行い、参加者に最新情報を提供する。これと同時に、同郷の新卒者をマークして、参加を勧誘していく。
3. 参加会費とは別に、通信費を徴収して、資金不足を補う。当面は参加者から500円ずつ徴収する。
4. 少しずつでも参加者が増えて来るよう、地道な活動とPRに努める。できれば、同級生や近所に住んでいる仲間を誘い合わせて参加してもらう。
5. 活動がマンネリ化しないように、新しい企画を工夫していく。

★新しい試みによる活動の発展と充実

このようにして新しいスタートを切った西湘地区活動

は、回を重ねる毎に会員名簿も充実したものに改訂され、幹事や参加者の顔触れも、従来の1〜5期生中心のものから、次第に10期生以降の人達へと移り変わって来ました。いや、むしろ、新しい年代の人達の参加が増えてくるにつれ、1〜5期生の出席が減って来たとも言えるでしょう。若者に圧倒されて、老兵の出番が無くなって来たのでしょうか。1〜5期生も、もっと積極的に参加して下さい。寂しい限りです。

出席者の顔触れの推移はともかくとして、各幹事の積極的な活動のお陰で、徐々に活動も軌道に乗り始めました。そして、幹事会の話し合いの中から、次のような試みが提案され、次々と実行に移されました。

1. 在住者への参加呼び掛け
2. 夏季親睦会の開催
3. 地区外参加希望者の参加
4. 写真等による地区活動の記録作成
5. 母校の教職員の方々のご招待
6. 同窓会本部役員のご招待
7. 冬季と夏季の役員2分化

ざっと数え上げただけでも、これらの内容が短期間の内に、活動の中に繰り入れられ定着化しつつあります。

★在住者も含めて 夏にも親睦会を！

従来は西湘地区出身者だけの新年会を、毎年定期的に開いていたのですが、昭和58年の暮れに開かれた幹事会の席上で、「来年からは、他地区出身者で西湘地区に在住している人達にも呼びかけて、夏にも親睦会を開こうではないか。」という提案が出され、昭和59年の新年会参加者から、満場一致の賛成を得ました。更に、幹事の一人であるE9福山一成氏から、「地区外ではあるが、日立製作所の神奈川工場の同窓生達が、この西湘地区の活動に是非共参加したい、との希望があるが、どうだろうか。」との提案が出され、これも同様に賛成を得ることができました。

この様にして、西湘地区は一度に従来の倍近い会員数を抱えることになりました。そして、昭和59年8月から毎年夏にも定期的に親睦会が開かれる様になりました。冬に行われる新年会は、当地区出身者を主体、夏に行われる親睦会は、当地区在住者を中心に、かくて、年2回の同窓会を開催する様になった次第です。

ところが、夏の親睦会の当初は、地元の大企業である富士写真フィルムと、日立製作所の小田原工場並びに神奈川工場のメンバーが、参加者の大部分を占めており、しかも冬の新年会に比べて参加人数も少なかったため、「新しい試みも、ひょっとしたら不成功に終わってしまうのでは。」との懸念が脳裏を過ぎった時もありました。しかし、昭和60年夏以降に幹事を夏と冬と二つに分け、

夏の幹事の中に富士フィルムと日立製作所専任の幹事を設けるなどして、積極的に活動を進めて来ました。この結果、夏の親睦会としては3回目の同窓会である昭和61年8月の時には、参加人数が27名という大所帯に膨れ上がり、用意した会場が狭過ぎる程の盛況振りでした。まさに嬉しい悲鳴という所です。

★母校の先生方をご招待して

参加する顔触れもいつの間にか常連と呼ばれる人達ができ、顔馴染みが増えてくるに連れ、歳の上下の別なく、和気あいあいとした仲間意識が感じられるようになって来ました。殊に二次会へ行った時の、10〜18期生あたりのマイクの奪い合いの様など見ていると、学生時代へ逆戻りしたか、の様な感さえあります。本当に素晴らしいムードだと思います。

この様な雰囲気の中から、たまには母校の様子を知りたい、先生方とも昔話などしてみたい、という意見が盛り上がり、昭和59年夏の同窓会で「この次から、古い先生方で、みんなの知っている先生をご招待しようではないか。」ということで意見がまとまり、早速昭和60年の新年会から教職員の方々に、ご出席をお願いするようになりました。

昭和60年冬 一般科目 三ツ井東司先生

昭和60年夏 事務(元寮母) 中村久子さん(昭和60年3月定年退官)

昭和61年冬 一般科目 市川良輔先生(昭和61年3月定年退官)

昭和61年夏 電気 佐々木俊夫先生(昭和62年3月定年退官予定)

★本部並びに他支部との交流を目指して

この様な活動を続ける中で、幹事としても漸くこの同窓会が軌道に乗りつつある、という手応えを感じ始めて来た昨今ですが、更により良い活動を進めていく上で、他の地区や支部はどの様な活動をしているのかということが、気になる所です。それと共に、本部の同窓会活動を支えていくのは、各地域毎の日常的な活動そのものにほかならないということで、少しでも本部との接触を計っていきたくと考え始めた所です。

そこで、その第一段階として、本部同窓会会長に、西湘地区の集いに是非出席して頂こうと思い、お願いした所、昭和61年8月の同窓会に三役そろってご来湘頂けたことは、大へん喜ばしい限りです。時間的に余裕がなく、十分な意見交換ができませんでしたが、これからは機会を得て、本部活動の様子を知り、また、本部役員の方々にも西湘地区の実情をもっとよく知って頂ける様、交流を計っていきたくと考えております。

これからの方向性としては、他支部とも接触する機会を設け、お互いの長所を学び、より活発な地域活動を進めていきたいと考えています。他の地区で活発な日常活動をしている所があったら、是非ご一報頂きたいと思えます。

★同窓会東京支部との関係について

一時期、この西湘地区の活動を支部組織にして、運営していこうかとの考えもありましたが、M1浜田健明氏達の発案による、昭和58年の東京支部発足と時期が相前後したこともあり、時期早尚という事で、残念ながら見送った経緯があります。そして東京支部発足に際しては、各自の自由意志で、できるだけ東京支部に加入する様、西湘地区としての考えを打ち出しました。従って、東京支部に対しては、その一部地域で、自主的に行われている日常的同窓会活動の一つが、西湘地区同窓会活動だ、と位置付けることができると思います。

現在の東京支部の様に、関東地方のみならず、東北地方や北海道までの非常に広範囲を包含している組織においては、到底細かな日常活動を望むのは無理だと思えます。実質的な役目は、ただ単なる連絡網の要に過ぎないと思えます。従って、これをもっと細かな、地域に密着した日常活動として、同窓会員同志の心の交流の場を設ける意味で、積極的に具体化していくのが、西湘地区の活動のような、地域毎の活動の役割だと思います。

この様な狭い地域毎の活動母体は、もっともっと、たくさん作られてしかるべきだと思います。県単位で一つ、あるは二つ、三つあってもおかしくないと思えます。現に我々の西湘地区活動は、神奈川県全体の約3分の1をカバーしているに過ぎません。欲を言えば神奈川県全体をカバーして活動したい処ですが、①神奈川県に在住する仲間が余りにも多過ぎること、②地域が広くなり過ぎること、同窓会を開く上での場所の選択がむずかしくなること(現在の小田原駅は西湘地区の交通の要所にあり、会員が参加し易い条件下にある)、③余り手を広げ過ぎると、地域に密着した活動ができなくなり、会そのものが有名無実化してしまう等々、諸々の理由により、活動の拡張は断念せざるを得ません。むしろ、横浜・川崎地区や県中央地区に、新たに同じ様な組織が、一日も早くできることを、心待ちにしている次第です。

西湘地区においては、既に会員数が100名を越えようとしています。れからは、今までのような中途半端な組織では、いずれ活動に行き詰まりが生じてくると思えます。従って、その時にこそ、遅ればせながら、この我々のちっぽけな活動母体が、新しい同窓会支部として、生まれ変わる時だと思います。その折には、改めて東京支部の幹事の方々に、支部運営のABCをご指導願いたい

と考えております。

★仲間が集い合う喜び

最近、同窓会を開く度に新しい顔触れが増え、集い合う喜びを、大いに感じている次第です。

現在、沼津高専の卒業生は、この昭和61年3月末時点で、20期生までが社会へと巣立ちました。そして、もちろん、当西湘地区の会員名簿にも、7名の20期生が登録されており、その中の3名が、この夏の親睦会に出席しました。そうです、もう皆さんは既にお分りだと思えますが、この西湘地区の集いは、沼津高専で一番の新鮮さを保っている、同窓会活動の組織なのです。

この新鮮さの源は、年に2回ずつ改訂発行されている会員名簿なのです。この名簿は、夏と冬の同窓会の席上で、出席者全員に配布されています。改訂の内容は、住所変更あり、転勤あり、転職あり、果ては海外出張や海外勤務の動向等々、常に半年以内の情報が盛り込まれている処に、新鮮さの秘密があるのです。

例えば、昭和61年8月31日現在の西湘地区の会員数合計は、103名（内、出身者61名、在住者42名）が在籍しており、海外出張者は4名（サイパン、ブラジル、シドニー、ヨーロッパ 各1名）となっています。いかがですか。

★西湘地区に縁の者 いざ集わん！

この記事を見て、自分は西湘地区の出身だが、あるい

は、西湘地区に住んでいるが、今まで1度も連絡や親睦会への誘いが来ていない、という方は、是非下記へご一報下さい。もちろん地域外からは是非参加したいという方も、大歓迎します。

〔連絡先〕

E 3 栢沼昭夫 〒250 小田原市成田674
TEL0465-36-2955

又は、

M 1 増田徳一 〒250 小田原市東町3-9-35
TEL0465-35-2938

年2回の同窓会は次の通りです。

〔冬〕毎年1月3日 午後4時30分から

小田原市宮小路「いろは」にて

〔夏〕毎年8月の最終土曜日 午後6時30分から

小田原駅前 中華「昇玉」にて

この西湘地区の同窓会は、万が一開催通知が届かなくても、会員の皆さんが必ず参加できるように、という配慮で、毎年開催日時、場所を同じにするようにしているのです。是非ご参加下さい。

(冬の幹事) E 3 栢沼昭夫 M 3 小笠原秀和
M13 興梠 裕 M18 日比野 聡
M 1 増田徳一

(夏の幹事) E 3 栢沼昭夫 M 2 佐野 博
E 9 福山一成 M10 湯山 敏
M13 興梠 裕 M 1 増田徳一

〔この文章は61年秋にいただきました（編集子）〕

退官教官、職員だより

近況報告

名誉教授 柳瀬 晴海

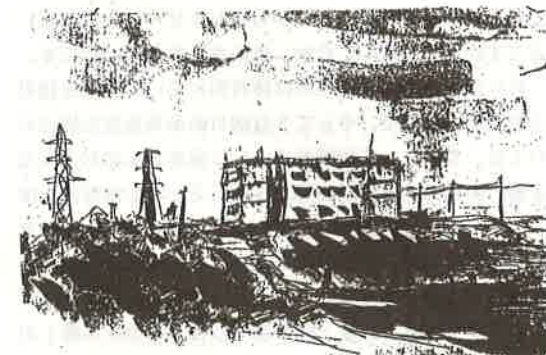
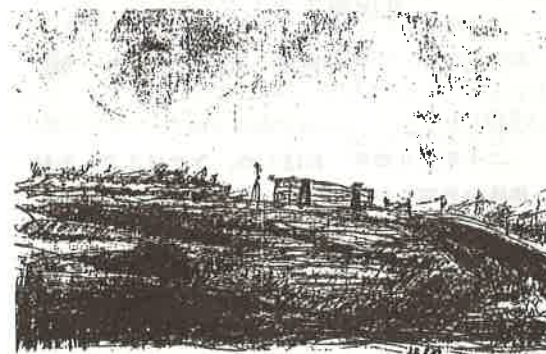
昨年三月に退官して、一年半程過ぎました。退官後は、浜松に住んでおりますが、毎週木曜日には非常勤講師として学校に行っております。

また、日曜日等には近所の子供達を集めて、サッカーや野球をやったり、自転車にのってスケッチに出かけたりする様な生活状態で、健康な毎日を送っております。

さて、学校は耐震工事の関係で改装され、23年前の大岡の新社舎の時の様な雰囲気をおもいだします。

また、電子制御科の教室、実験室も近く工事開始のことですが、ますます学校が充実してきたことを感じます。年をとると、過去の話になってしまい、申し訳ないのですが、かつて運動場に鉄塔の建っていた事や、原始林があった事もなつかしいことで高専勤務22年間はよく覚えております。

この絵は38年8月頃に描いたものです。現在の校舎と比較して見てください。参考迄に。



つぎに、同窓会創立20年おめでとう。私は発会以来電気系の顧問教官としてきましたが、殆ど市川先生に計画や行事をしていただきました。

さらに同窓会の今後の発展を期待いたします。

私は同窓生ということについてよく学生に次の様なことを話しました。

先輩後輩は縦の線、同学年は横の線、このたてよこのひとつの点が君達の一人だということです。

同じ学校、寮そしてグラウンドですごしたことを今一度ふりかえってみて下さい。

同窓ということは、よき友人をつくることとってよいのではないかと思います。

君達は若い。卒業生諸君の今後の活躍を願うものがあります。

まともなく書いてきましたが、私も教師生活36年、そして64歳、まだいじょうぶ。今ひとつの転機の時期と思っている次第であります。いづれまたおあいしましょう。

〔この文章は61年秋にいただきました（編集子）〕

新人類に興う

名誉教授 米崎 茂

卒業生諸君から近況などのお便りをいただくことが多い。社会人として、めいめいのもつ個性を發揮しつつ、職場で活躍していることを知ることは楽しいことである。

今年の春には、私の卒業生が、数十人も集って、伊東温泉で同門会を盛大に開き、お招きをいただいた。宴会の後、人通りも絶えた夜更けの温泉街を肩を組んで高歌放吟した後、宿でぞこ寝をして夜通し想出話や人生論、恋愛論にと花を咲かせた。

そして先輩、後輩皆、旧知の如く、又兄弟姉妹のように親しくなった。又仕事の上でも良き連繋ができたことをお互いに喜び合い、再会を期して別れたことは非常に有意義であった。

化石人類とでも云うべき私も、新人類の話には共鳴するところが多く、又教えられるところも多かった。

しかし、後になって考えてみると、この人達は、新人類といえども、今から20~30年もすれば古墳人類か縄文人類に達するであろう。そしてその時には、世の中がどう変化するかを推測してみることにしよう。

先ず、過去20～30年間にどう変化したかを回顧してみよう。

もともと技術のオリジナルは外国から来ていた。そしてそれらを国産化することに追われた。外国から来たものをバラしたりして中身を調べた上でスタートしたからR(研究)を省略してD(開発)から出発したので成功する確率が高かった。ラジオやテレコ、ステレオも生産は遂に世界一となり、テレビもせいぜい16吋までで兎小屋にはこれより大きいテレビは必要がないと思われた。これらの世界一もわずか数年の命で、今ではすべて後進国で生産されている。

テレビは、兎小屋が大して大きくなっていないのに、昨今では32吋以上のものが大変な人気である。

ミシンやピアノの生産もかつて世界一となった。ピアノが最もよく売れたのは日本国内であった。他の商品なら買ってすぐ使えるが、ピアノは余程忍耐強く練習しても容易なことでは役に立たない。当時20万も30万もするピアノが不思議によく売れたものである。

文化とはこんなものだろうかとか大きな疑問を抱いた。今ではミシンやピアノの会社も赤字で四苦八苦している。その当時、誰が今日の事態を予見し得たであろうか？

戦後の歴史をみれば、先ず農家がうるおい、次がガチャ万の時代だった。つまり織機がガチャンと音をたてると万という金が入った。次いで鉄鋼、造船、自動車、エレクトロニクスと続いてきた。その次が、セラミックスとバイオである。

これらの変遷は当然といえば当然である。

これらの変化そのものを楽しみたいものである。

諸君はエリートの一人であると世の中で認められている。秀才であり、学校教育の枠組に適合させられ、優れた成績で卒業した。多くの知識を授けられたが、果たして、将来を予見できるか、その知恵があるかをよく考えてみる必要がある。既に諸君は、しっかりした枠組をもって待ち構えた社会の中に身を投じた。自営業でも営むならまだしも、国の機関とか大会社に入れば、一つの歯車にされてしまう。エリートと言ってもせいぜい歯車が少し大きい位である。そこで失望や不平や挫折感を味わう者がでたりする。時々そういう声を聞く。100の努力が100で報われ、200努力しても、たかだか110位である。130報われる為には500も努力しなければならない。こんな事は始めから承知の上で努力する必要がある。仕事を趣味と思い、仕事を奉仕と割り切ることである。

ここで物の見方、考え方の問題になる。

人の欲望には際限がないが、しかし物の本質はつかみ易い。少なくとも優秀な諸君は学校の勉強で、テストの答を知っている。ところがこれがくせものである。

書物の字は黒いところを読むのか、白いところを読む

のかと聞かれて黒いところを読むと100点だと思っただろう。まちがいである。両手を打ってどちらが鳴ったかという問題に似ている。

「空気は目に見えないが、水は見える」と教えられて別にあやまらぬであろう。然し水中にもぐって目を開くと、水は目の前一面にあって見えない。そこに泡が上昇してくると、これは確かに見える。

物理はよく分っていても、化学は知らない。又この逆も多い。境界領域の学問が大切であるが、これらの知恵は教育されていない。メカトロという言葉が最近よく使われるようになった。

「鏡に写った自分の像は左右入れちがっているが、上下はなぜ入れ替わらないか？」

「50℃の湯に50℃の湯を加えたとなせ100℃にならないか？」

「電気は正極から負極に流れることになっているのに、電池の中では負極から正極に向かって流れるのはなぜか？」物の本質をよくつかむ必要がある。

「磁石はなぜ鉄を引きつけるか？」誰か解答してほしい。これが説明できる人がいれば21世紀を予測できる。

新人類頑張れ!!

合縁機縁のとき

一近況報告として一

名誉教授 市川良輔

(その一)

二十^{たひせ}年^{よとせ}まり四年 おほしぬ。さやけくも、合縁機縁の思満ちつつ

昨年(1986年)3月30日を以て無事定年退官いたしました。平凡に、あくまで平凡に退官することが出来たと思っております。唯それだけに、きわめて当然な報謝と感銘の念が今でも一入に湧き起るのを、此の日にしてなお止め得ません。沼津高専は私にとってこよない心のふるさとになってしまったのかも知れません。きざな言い方ですが、先ず以てこれが、偽らざる近況の心境です。

昨年度末の終業式の日には体育館において在校生諸君や教職員方の前で、そして3月20日の卒業祝賀会場においては、私にとって現職最後となる新卒業生諸君と父兄来賓の方の前で、ともに在職24年間の乏しい私的想念をほつりと一言、「わが沼津高専は永遠に不滅です。」と、吾乍ら惜別の実感で述べ得たことは、恒久に忘れ得ぬことになるだろうと思っています。是は謂うなれば、浅学非才の身が文字通り放縦三昧の僥倖に在り得た「馬齢」の極、此の日にしてどうにか味い得る精一杯の有終の投息

だったのかも知れません。であるにしても、何故か此の言辞の背後に、夥多幾人の同窓生諸君の姿勢や顔容が彷彿と意識されたことを、私は今もまた思い出して居ります。

ともあれ、多くの同窓生の皆さん、長いこと本当にいろいろと有り難うございました。

そして、私にとって何よりも澎湃たる感動の渦でもあったのは、あの、いちやく有志諸君の発起によって江湖の会員諸君の多数から、私の身に過ぎるばかりの懇篤な祝意と記念の芳志が寄せられたことです。而かも5月17日、伊豆長岡千歳荘での祝賀会の一夕には、近郷近在はもとより、此の日のためかねて用意して遠域からまで数年ぶりにわざわざ馳せ来った代表諸君の、こよない懐旧のかんばせも多く、身に沁みて感愛悉く胸奥に漲るの思念、まさに終生の果報を実感しました。席上また、有志一同名の感謝状には、顧みて汗顔の極みながら、厚情の程辞し難く、敢て惠贈を辱うした次第ですが、その文辞の一節に曰く、「……終生我が母校および同窓会の発展になお一層貢献しなければならぬことを“宿命”とせよ……」と。いみじくも「宿命」の一語、論なく我が沼津高専と沼津高専同窓会ゆえの一己の在り来しと行く末でなくて何がありましょう。まさしく拳々服膺、断じて忘れ得ざるものと決し了して居る近況です。

さらに、この報謝の微衷を返すべく、遅ればせ乍ら過日に蕪辞を諸君の許まで送ったわけですが、乃ち曰く、「思えば、沼津高専ゆえの諸君との斯かる“合縁機縁”こそ、まことに小生にとって、永くゆたけく、こよなき生涯の至宝として恒に相渉るものと、心中ふかく銘記するところであります……」と。

まことに夫れ故にこそ、「宿命」と「合縁機縁」の二十有余年、“みち一すじよ”のあれこれを、親愛なる同窓生諸君と何時の日かあらためて回想し語り合いたく、私にとっては此の日にして正に「須叟の間の二十有四年」だったことを、今日また思い続けているのが、これまた一つ、切なる近況報告だったのです。

(その二)

実は、以下全くの私事ゆえのことわりを申し述べさせていただきます。

昨年3月末の退官と同時に、4月1日付をもって私やからも、沼津高専名誉教授称号が授与され、さなきだに報謝の念慮一入であるべきところ、時恰も学科増(電子制御科)のこともあり、恩沢の人慶伊富長校長から非常勤として続けて来れの仁恵と厚配を辱うし、魯鈍ふ心の方途の先には此の上ない幸いとばかり、まさに「昨日のまま」の感触で一般科目国語の1年生と4年生の授業に週4日も平然と、相も変らず、図々しく出ていたのに、

これこそ全く思いも寄らず、12月1日朝、文字通り突如として急性心筋梗塞におそわれてしまい、寸時を争う救急車で急拠順天堂伊豆長岡病院に搬入された次第です。いま殊更に言訳めきますが、実のところ、次の同窓会誌に近況消息を寄せよとの言を受けていたのが、この頃どうにか漸く机上に草稿をひろげ放しにしてあり、思わずも必然的な中途擱筆のままになってしまったわけです。然し本当に幸運にも病気の方は、発作から入院までが極く短時間にはこばれた上に、月曜朝で医療スタッフも出揃っており、担当主治医の応急カテーテルによる果敢な療法が効を奏し、約3時間半ほどで集中治療室に入り、さらに余日を一般病棟で入院加療を続け、12月24日にはお茶の水の本院に寝台車で転じて念のため治療検査の結果、いわゆる「バイパス療法」などのオペ(手術)も全く要せず、予想外に早く治癒状態にいたって居り、12月30日には退院帰宅し、ともかくも自宅療養のままの越年から外来通院診療となって、目下のところはもう殆んど快癒平常に復しましたが、時候がら大事をとってなお自宅静養に過ごし、軀ての新学期ごろまでは現状を維持させる所存ですが、頃日、私としては極力辞退したのですが、同窓会の現会長以下三役の君らがわざわざ見舞いに来訪してくれましたことは、ただ恐縮と共に有り難く感じているわけです。そしてこの折におのずから近來の会誌編集の話にも及び、まことに期せずして、吾ながら挫折の思で片付けてしまったあの草稿でも、未だ此の月末ぐらゐの余日あって復するが可という親切でしきりな慇懃にほだされてしまい、ここにたどたどしく、然かもきわめて間際のわが近況報告を俄然一つ加えたわけです。而してなお笑止の一言、さしたる好みでもなく、いわば軍隊経験の随性のままにひたすら24年間を喫し続けた、知る人ぞ知る迷煙？のしぐさ、(但し実際は過ぎる創立20周年に柄にもなく実行委員長の負荷にあえいど為か、いつ頃からか高血圧の症状を見て近來の二年間ぐらゐは殆んど節禁煙を敢行していたつもり)誓ってきっぱりと禁じ、徹して減塩食生活の断行に転じ居る近況をも併せて報告するものです。

さて最後に、この頃の仄聞によると、いみじくも本年を以て「創設二十周年」とするわが同窓会自体は、こよなき記念事業の幾つかを予案し、その一つには必ずや「二十周年記念会誌」の発行が目論みられると思います。僥倖にして縁あれば、如上の理由から筆措いたわが「合縁機縁の記——須叟にして二十有四年」などの題名をまを復統させると共に、いつか一度は、「母校校歌作詞の由来」などをも、あらためて草してみたいことを、負け惜しみながらも付言しておきたいわけです。

だが、兎にも角にも、ここに再三度、「……健康に留意し修善寺の団ちゃんとして終生我が……ことを宿命」(感

謝状文面)としなければならぬ最新なのが、またさらに加えて一つ、私の“最”近況であるのかも知れません。

晴れ晴れと かがよふ富士を見に出でむ。ゆくりなき日の 病癒えたり。

—昭和62年2月現在—

近況報告と思い出

伊 東 仁
(元沼津高専出納係長)

沼津高専同窓会創立20周年おめでとうございます。私は沼津高専が創設された昭和37年から勤務して、昨年(昭和60年)3月31日付けをもって23年間の勤務生活を無事終えて定年退官いたしました。

現在は時間に縛られない自由な環境になり一面解放感が満ちている気持を強くし、暇になったらあれもしようこれもしようと考えていたことを少しずつ実行に移しつつある昨今です。

いずれにしろ長い間の生活習慣を急に変えることは、なかなか困難な事ですが、幸いに私の先輩の御世話で私立高校に第二の職場として勤務している近況です。

私は昭和47、8年度の頃、学生課教務係長で同窓会の仕事をお手伝いしたことを思い出しますと、その時は鞠子誠会長、中村誠一副会長、水上重徳事務長外役員の方々が本当に熱心に努力され、同窓会の基礎作りをされ着実に軌道に乗せられて、時期会長外役人に引継がれてゆき現在のような活発な同窓会活動が出来、発展されたのだろうと思われま。

当時は、会則の不備、会費の未納、名簿の不備等で、手はじめの仕事として会則の改正、会費未納分の徴収方法とそれに名簿の不備、というより名簿もなく連絡した「はがき」を使っでの準備と大変だったと思います。あれから何年か過ぎて20周年のこんにち、同窓会の設立目的である会員相互の親睦を計り立派な同窓会に達成され、今後は尚一層活発な同窓会活動がなされ、ますます立派な同窓会となることを切望いたします。

私が沼津高専に初めて勤務した頃を思い出しますと、最初の1年は金岡中学校内の仮校舎で始まり、寮生は臨海寮(現在の港湾)で宿泊しました。仮校舎は戦時中海軍工廠の一部で、仮校舎内は板張りの教室、廊下で防腐剤を一ぱい塗りつくした、ギュギュと音のする、うぐいす張り?で窓は釘を打ちつけた、それこそボロ仮校舎でした。また臨海寮は木造平屋長屋建で窓の隙間から吹き込む風は、風と共に松の枯葉が舞い込むような本当のパラック建て宿舎(寮)でした。でも1年後には仮校舎か

ら現在の大岡小林ケ丘に移転しました。しかし学校周辺は農道で変化は微々たるもので、雨が降れば道は泥沼となり長靴通勤通学生が多かった。また風が吹けば空が褐色になるほど土砂ほこりが舞い上がる状態でした。それから数年、現在では道、いや道路は舗装され、森は造成されて住宅地となり、住宅が立ち並び学校周辺は見違えるほどに変化した今日、このような立派な校舎や施設住宅その他環境も整備され、私生活も豊かになって、同窓生の皆様は全国各地で、あるいは海外でそれぞれに活躍されている姿を思い浮かべております。同窓生の皆さんどうぞ各自が選んだ道です。ベストを尽くし悔のない毎日を頑張っって送って下さい。そして社会人として立派に大成することを念願致しております。

ではとりとめののないことを書きましたが、沼津高専同窓会の益々の御発展と皆様の健康で御活躍されることをお祈り申し上げます。

第3の故郷「室戸」にて

国立室戸少年自然の家
庶務課長 中村 幸男
(元沼津高専庶務係長)

同窓会誌の発刊に際し、原稿をとの依頼の手紙を受け取り、何を書こうかと考えたが、沼津高専同窓会については、これといった苦労話もエピソードも持ち合わせないため、私の近況と、沼津を第2の故郷とすれば、第3の故郷たる「室戸」について少々書かせていただき、お許しを乞うことにした。

早いもので、沼津を巣立って室戸へ赴任して半年が過ぎました。現在の職場は、学校と異なり不特定多数の、保育園児から老人クラブのお年寄りまでの年齢層の人達を相手にすることで、赴任当初は戸惑いがちでしたが、やっと仕事にも馴れてきて、これから本番といったところです。

室戸少年自然の家は、同じ施設の中で、全国一利用率が低い施設のため、利用率向上を計るPR作戦に参加し、京阪神方面へセールス活動にでかけたりしています。机上の仕事は沼津のころより減った反面、肉体的労働が増え、汗を流している毎日です。もともと室戸少年自然の家は、学制100年の記念事業として設けられることとなった国立少年自然の家の第1号施設で、昭和50年10月に設置されたもので、学校外活動の拠点としての新しい性格をもった社会教育機関であり、自然の中で少年達が、自ら伸びようとする諸活動を促進するとともに、少年教育指導者の研修、少年達が仲間と寝食を共にする集団宿

泊生活を通して、自然に対する心情や社会生活における基本的な態度を養うなど、少年達のたくましい心身を育み、豊かな人間形成を図ることを目的として、屋外活動を主体とした施設のため、自然との調和に注意しながら、子供達の活動の場(例えば、フィールドアスレチック・オリエンテーリング・追跡ハイキング・ピースマップツアー等のコース、冒険の森・子供の森・果樹園・星を見る丘等)の整備に職員と子ども汗を流している毎日です。

室戸少年自然の家は、昨年創立10年を迎えた歴史の浅い施設です。子供達の活動プログラムは全国一を誇るどころです。庶務・会計の仕事については、文部省の内部部局ということで基礎があって無いような妙なものです。いわゆる一人勝手な内規等はままならないというところ。それ故に、新しく開発する事務的な要素は少ないようです。庶務課長という名をいただいた訳ですが、仕事は庶務・会計全般はもとより、室戸少年自然の家内の仕事全般が集ってくるような気がする、いわゆる雑務課長とといったところです。

室戸の気候は、沼津のそれと良く似ているように感じられます。また、室戸の人達は人情味の厚い、素朴な心の持ち主が多く、大変住み良いところです。穫れる作物も三島・沼津のそれと変わりはないが、時期的に1~2ヶ月程早く、びわが5月、栗が8月など、その収穫の早さにおどろいた次第です。また、さつまいもは年2回の収穫で、最初の収穫が終わるとそこは田圃となり、稲が植えられ、収穫の際のツルが畑に植えられて11月の穫り入れとなります。また、室戸といえば海を思い浮かべる人達が多いと思います。室戸岬の乱岩礁の上に立って海を見るとき、地球は丸いにつづく感じさせる水平線がそこにあるのです。魚の種類が多く、今までに見たこともない魚が店頭と並べられ、今までに釣ったことのない魚を釣り、今までに採ったことのない貝類を採り、大いに海に親しんでいます。

この室戸周辺は祭典が多く、5月の金剛頂寺(西寺)を中心とした大師様(弘法大師のこと)の祭りを最初にして、多くは10月にまとまり、連日、神祭(氏神様の祭典のこと)の招待で、場合によると一夜のうちに10軒余

りの家を訪問しなければならなくなる時もあり、わずか半年しか生活していない室戸が、もうかなり以前から住みなれた町のような感じがするところ。以上、近況報告と室戸のPRをさせていただきます。

沼津高専同窓会も来年(昭和62年)には創立20周年を迎えることとなり、その発展を心から祝福申し上げる次第です。私が同窓会と直接関係を持ったのは、教務課勤務となった昭和50年5月からだったと思います。当時の同窓会は、一時期の低迷から抜け出し、順調な発展をしている時代であったと思う。そのためか、教務でのお手伝いは、通帳と印鑑の保管程度のものではなかったかと思。それより少々面倒な仕事は、庶務係時代に受け持たざるを得なかった郵便料金受取人払用の現金の出納であった。これは、当時の事務長坂井氏の陰謀にはめられたと現在でも思っているもので、その仕事は今も庶務係に残っていると思う。直接に、間接に同窓会の皆さんと関わり合いをもたせていただいたおかげで、私なりに私知らない沼津高専卒業生の結びつき、気風等が知ることができ、また卒業生諸氏と親しくできたことは、大変幸せなことだったと思います。同窓会創立20周年を祝福すると同時に、この一つの区切りを基盤として、更に大きく発展し、母校、沼津高専の発展に寄与されんことを遠く室戸の海よりお祈りしております。

退官、転勤者一覧

| | | |
|-------|-------|---------|
| 60年3月 | 機械工学科 | 藤野 教授 |
| | 電気工学科 | 柳瀬 教授 |
| 61年3月 | 機械工学科 | 喜多 教授 |
| | 機械工学科 | 伊吹 教授 |
| | 電気工学科 | 清水 教授 |
| | 工業化学科 | 米崎 教授 |
| | 一般科目 | 市川 教授 |
| | 職員 | 中村 庶務係長 |
| | 職員 | 伊東 出納係長 |

同窓会によせて

沼津高専の近況

事務部長 三浦 徳勝

沼津高専に転任を命ぜられ、当地に着任してから早1年7か月が経過しました。前任地松江高専において転任の内示を受けたとき、沼津の地に思いを馳せますと、温暖な気候と温和な人間像が浮かんできました。私も、昭和25年から文部省を振り出しに、各地の大学等において教育行政の任に当たってまいりましたが、昭和36年より約3年間御殿場の国立中央青年の家に在任したこともあり、沼津高専が非常に身近なものに感じられた次第です。私が本校に着任して先ず感じましたことは、同窓会組織、教育後援会組織が非常に整備され、かつ活発に活動しておられるということです。殊に同窓会におかれては、本校に在職する卒業生で構成する校内幹事の方々、企業に勤務される方々などで構成する校外幹事の皆様が、緊密な連絡を取りつつ万全の体制で組織を運営しておられると伺いました。また、この度沼津高専同窓会が発足して今年で20年を迎えられるとのことで、これは歴代役員の方々の努力に加え、全会員の皆様が沼津高専を媒体として、一丸となって強固に結束されていることの証であると感じております。

皆様既にご承知のとおり、沼津高専は昭和37年度において、高等専門学校制度発足と同時に第1期校として設置されました。以来20回にわたり、2,833名の優秀な卒業生を社会に送り出してきたところであり、その多くは一流企業に就職され、現在各分野で活躍されております。ここで、卒業生の最近の傾向を見てみますと、高専卒業生を3年次に受け入れる制度の確立された技術科学大学が2校設置されたこともあり、大学に編入学する者が年々増加してまいりました。ちなみに、前回卒業生の実績として主なところを挙げますと、静岡大学6名、豊橋技術科学大学7名、長岡技術科学大学5名、千葉大学3名、その他東京大学、東北大学等を含め、総数で30名が編入学し、卒業生の約20%を占めるまでになっております。

今年度から本校が大きく変わった点を取り上げてみますと、電子制御工学科が新設され、1学年の定員が200名となり、4学科5学級の編成で、総定員が1,000名（完成年度時）となったことです。この学科は、近年における高度先進技術の発展に対応し、更にその振興に資するため設置されたもので、カリキュラムにおいては、制御対象を含めたデジタル技術と併せ、それらハード

ウェアを活性化するソフトウェア技術にも標的を置いたものとなっております。本年度第1学年に43名（内女子1名）を受け入れました。また、臨教審の答申に言われる高等教育機関の多様化に対応するため、大学設置審議会高専分科会において、高専における教育分野の拡大と専科大学（仮称）への名称変更が審議されているところであり、高専制度改革の時代ということができそうです。

学校施設の面においては、耐震を兼ねた校舎改修工事が施工されており、既に昭和60年度には一般講義棟、管理棟の工事が完了し、本年度は引続き電気工学科棟、工業化学科棟を施工中であります。この工事は、建物の内・外装、電気・給排水等設備の改修と兼ねて外壁を補強するもので、建築後20余年を経過し老朽化した建物のリフレッシュと、東海地震を想定し、それに耐え得る強度を確保する目的を併せ持つものです。また、本年度以降の計画として、学科増に伴う校舎新鋭、機械工学科棟及び図書館の耐震を兼ねた校舎改修、居住改善を目的とした学寮の新営及び既設寮6棟の改修、学科増に伴う、学寮の新営及び食堂・浴室の増設などがあり、これが完了すると一層充実した教育環境が整備されることとなります。

日ごろ本校に御支援頂いている同窓会の皆様には、昔の面影を残しつつも、更に充実し発展する母校を、是非お訪ね頂きたい。

ちっちゃな思い出

一般科目 三ツ井 東 司

昭和37年の或る日、仮校舎の金岡中からスクールバスで大岡の造成現場を見に来た。砂利道に車の轍がひどく、揺れと埃に悩まされながら到着してまず目に入ったのが、高圧線の鉄塔と丘の苗畑で人家はゼロ、帰りに杉の苗をひろって仮寄宿舎、臨海寮の空地に仮植、翌年持ち帰って清峰の南側に並べて植えたのだが、今では一抱えにも成長して、国有財産の一つに数えられているとか。道路の悪さは筆舌に尽しがたいものであった。北小林バス停に出る国産電気の西側の道は、雨の降る度に高専生が西の畑へと道をひろげ（ぬかるみを避けるため）轆轤を買ったものである。自衛の策としてゴム長着用と相成る訳で、長靴スタイルは高専生だとの異名をとる程であった。

今のプールやテニスコートの辺りは、裏山の水がグラウンドを通して国産の東側へと抜ける水路の溜りが池になっていて松林に囲まれた憩いの場でもあった。山女や鮎

も住みつき、釣り好きな一・二期生は昼休みに糸を垂らしたものである。そんな軟弱な地盤のために沈下して、プールは東西に十数種の歪みができてしまっている。釣りとと言えば、E1のYを思い出す。晩秋の日曜日私の留守中に30種程の鮎が5匹も届けられた、私服で見知らぬ若者が本校の学生と気付かない女房は気味悪がって手を付けないうまだったの寮生に問い合わせた所、Yのプレゼントで狩野川の落ち鮎とわかった、日頃無口なYなので名前も告げずに立ち去ったらしい、夕食は豪華な鮎料理と相成った次第。（その頃私は今のハンドボール場の所に五軒の官舎があり、その一つに住んでいた）

長野県伊那生まれのM2Kは山芋掘りの特技を持っていた。山芋は市販のつくねいも、やまといも、ながいもとは違って自然薯である。その頃は静鉄団地や光峰、栄峰、弓道場などは無く、道路から北側は雑木林であった。Kと数名の級友は山へ出掛け、父親が焼津の船元のTは（後に一橋大へ進む）鮎の切身を持ってきて我が家では麦飯を炊いて、山掛けやトロロじるで腹を満たしたのである。山芋掘りには多くの思い出がある。M6のもその一つである。IやY等と中伊豆のMの案内で一日を楽しんだ。火山灰で石が少なく掘り易い代わりにかなりの深さまで伸びている。背丈程のものを数本茅で束ねて持ち帰ったのだが、東海道線の車中で乗客にほめられ得意になったものである。その頃学生会から許可制か届出制かなど六項目の要求が出され、何となくギクシャクしている時だっただけに、いい汗をかき、握り飯をほうばり、紅葉を眺めての山合いでの談笑には、何とも言えない快いものがあり、以後山芋掘りの病みつきの一因にもなってしまった。

二期の部員達とは落取りに出掛けた。裾野駅から、2、30分歩いた所で、履物が濡れるのも、指先が灰汁で真黒になるのもかまわず摘みまくった、5月の春風に乗って鼻をくすぐる露の野趣深い香りは忘れられない。その中の一人で、キャプテンのE2、Hはそれから13年後に癌で亡くなるうとは、ああ無常。露は達磨山や箱根の遠足の時にも摘んで帰った。達磨山での帰り途は、戸田へ下って船で沼津港まで戻るコースであったが、午前の快晴が嘘のような俄雨に出会い、ビショヌレになった某教官に嫌味を言われたのも思い出す。露は保存用にと、生醤油だけでの伽羅露にするのもよし、味醂・砂糖・酒などを加えて柔かく煮込んだのも格別で、後者の調理法は、市川先生の奥さんに教えていただいた。

学校は四半世紀に、同窓会は二十年に、同窓生は3000名にもなろうとしている。二学科、三学級120名の学生定員でスタートしたのが、今では四学科、五学級200名の学生。施設、設備も整い、名も実も天下の沼津高専と誇れるのは、卒業生諸兄の限らない努力以外何者でもな

いと思っている。多くの立派な先生方の中にあって、変わりゆく環境を思い浮かべ、四季折々の自然を愛で、食し、学窓を去りし同窓生の現役時代を振りかえっては楽しんでる年寄りの一人位居てもおかしくはないであろう。

新任あいさつ

電気工学科E6 江間 敏

この度、電気工学科の教官として着任しました江間です。どうぞよろしくお願い致します。私は沼津高専6期生です。昭和47年卒業後、金沢大学へ編入学し、3年で卒業後、東京工業大学大学院へ進学しました。昭和52年大学院卒業後、国鉄本社に入社しました。国鉄に約10年間勤務した後、61年8月末退職し、9月から母校に勤務することになりました。

国鉄では電気鉄道用変電所の計画、設計、工事。変電所、電車線路等の保守業務。国鉄が世界に先がけて開発を進めている超高速鉄道、リニアモーターカーの研究、開発の仕事に従事してきました。高専卒業後、大学、国鉄を通してずっと電気の強電部門、電力関係を一貫してやってきました。地域的には国鉄は全国ネットワークを維持、運営していますので、全国を歩きました。

昔から国鉄に入社すると、駅員から始まり一通り短期間に経験し、それぞれの専門に別れていくというシステムでした。私はその実習を北海道の札幌を中心に6ヶ月間行った後、大阪で変電所工事に従事しました。その後、リニアモーターの仕事で2年間九州に行きました。実験場は宮崎県日向市にあります。昭和54年12月にリニアモーターが開発目標の時速500キロをこえ、世界最高の517キロという記録を達成した時、幸運にもその仕事に携わりました。56年春から東北へ移り、4年間岩手と山形において、電鉄用変電所、電車線路などの機能維持の為の検査、工事をやる仕事、いわゆる保守業務に従事しました。岩手県内を走る東北本線と新潟と山形にまたがり日本海に沿った羽越本線をそれぞれ担当しました。その後、60年3月東京に帰り、国立にある技術研究所及び本社にて、再びリニアモーターの開発、研究に従事してきました。

国鉄在職中、様々な事がありましたが、東北の冬の厳しさは忘れることができません。金沢で3年間過ごしたので雪については始めてではない訳ですが、東北の冬は一段と厳しいものがありました。特に何10年ぶりと言われた「59年豪雪」は、凄まじいものでした。当時は山形県酒田市にいました。その冬、雪おろし事故を筆頭に山形県で約20名の人なくなり、隣の新潟県でも40名

近い死者が手ましました。被害総額も一県当り100億をこす額でした。日中の最高気温が氷点下の「真冬日」が1週間も続き、宿舍のドアが開かなかったり、水道は凍結して出なくなり、国道も通行止、一面結氷した川も初めて見ました。等々暖かい静岡県では想像もできない状態でした。そのような気象では、鉄道の事故も踏切事故、パンタグラフ等相次ぎ、列車も一冬に何日か、無ダイヤ状態となり、厳しい天候の中、仕事をしてきました。

一方、国鉄在職中、様々な職場で高専卒業の人と仕事をしてきました。若干の人たちは、内部試験により幹部になられている人もいますし、1期生の人たちは管理局等で係長になりバリバリ仕事をしている人が多くいます。本社、技術研究所では全国から集まっています。私の個人的には、東北地方では函館、一関高専。大阪では神戸市立、津山等々。九州では北九州、大分高専等出身の人たちと一緒に、今でも連絡しあっています。国鉄における高専出身者は、一般的にまじめで、堅実な仕事をするという印象です。

さて15年ぶりの母校の様子は、高専初期の時代に卒業した私にとって大きく躍進しています。建物関係のみでも福利施設である尚友会館、第2体育館、弓道場等、卒業時なかった建物が、校庭所狭しと建設されています。さらには、現在耐震工事の真っただ中であり、新学科棟建設についても計画されています。学生の様子と言うと、在学当時ポツリとしか見受けなかった女子学生の数も、現在約50名程となり、女子寮も完備されています。私も卒業後、大学、大学院と進学した者ですが、私の頃は受け入れ大学も数える程であり、採用人数も若干名という状況でしたが、現在は豊橋と長岡に技術科学大学ができ、あるいは東大をはじめかなりの大学で受け入れるという状況となっています。さらに高度な研究、学問をする道も大きく開かれてきています。

日本各地を歩いた私ですが、静岡は日本で有数の気候温暖の地であり、東京、大阪間の東海道メガロポリスの一角に位置した工業地帯でもあります。

全国には富士山の形容をとった山が各地にあります。山形の鳥海山は出羽富士と呼ばれ、鹿児島の開聞岳は薩摩富士と呼ばれています。この沼津には、正真正銘の富士山がバックに控えています。この恵まれた環境の中、沼津高専の着実な発展のため頑張りたいと思います。

沼津高専までの道

E12 遠藤良樹

昨年4月1日付けで、母校沼津高専教員として採用さ

れました、電気12期の遠藤です。所属は一般科目で数学を教えています。なぜ電気卒業の者が一般科目へと思われるでしょう。私自身も、今こうして沼津高専にいて、在学中、教えていただいた先生方と共に高専生に「数学」を教えている自分が今もって信じられないと感じる時があります。

私は高専の2年の終わりごろから3年生にかけて、中学時代から好きだった数学がさらにおもしろく感じるようになり、どうしても数学をもっと深く勉強したいという衝動にかられました。3年で中退して大学へ行こうと考えたのですが、結局その勇気もなく、ここを卒業後改めて理学部の数学科へ入り直すことにしたのです。

しかし、自分の努力の足りなさや能力の無さから2浪し、やっとのことで岡山大学理学部数学科に合格しました。昭和55年4月、私が22歳の時のことでした。

岡大の学生寮に入り、4歳も年下の者と共に講義を受け、生活するのは不思議と異和感のないものでした。長い夏休みが終わり、10月になるころには他の学部の友もでき、秋の夜長をいろいろなことで語り明かしたこともありました。

岡大は1年から専門の講義があり、「数学要論」と名のついたその講座は、現代数学をこれから勉強していく上で必要な集合論を講義するものでした。内容は、高専数学、あるいは高校で習う数学とはまったく性質が異なるもので、抽象化することに、いかに慣れていくかを訓練するものと言えるでしょう。

2年、3年となるにつれ専門も多くなり、それは私にとっても楽しい時間が増えることを意味していました。このころでしょう、2浪してまでも大学へ来て数学を勉強してきて良かったと実感できたのは。

4年になり、私は幾何学の講座に入り、抽象化された曲面上での解析を勉強することにしました。そしてさらに深く数学を研究していきたいと、そのころ感じるようになり、大学院進学を真剣に考え出したのです。

4年間で無事卒業し、結局九州大学大学院に進学し、そこで幾何学的測度論を勉強すると共に、研究課題を偏微分方程式とすることを決めました。2年間は短かく、岡大時代のように学生生活を楽しむなどという時間はありませんでした。

2年目の夏から本格的に修論に取り組んだのですが思うように進まず、12月ごろになってやっと下書きのようなものが出来上がりました。ところが、中間発表の段階でもう一度計算をチェックしてみると重大なミスが見つかりました。それは簡単なミスであるが故にあとの理論の展開がまったく無意味になるような致命的な誤りでした。

その年の正月、つまり昭和61年の正月ほど重苦しいも

のはありませんでした。そのころ、母校の沼津高専への採用の話が進んでいて具体的な面接の日まで決まっていたのです。しかし、このままでは修論は完成せず、下手をすれば課程修了さえあやうくなっていたのです。

修論で展開した結論は正しいはずだ！それを信じて毎日、アプローチの方法を変えてカベを突破しようとしたがうまくいかず、あきらめかけていたところでした。考えることもいやになり3日ほど修論のことを頭の中から放り出し、下宿近くを散歩したり、天神（福岡市の中心）へ買い物に出かけたりしていました。

その間、岡大から九大への6年間のことについても考えてみました。自分の勉強してきた数学のこと、岡大で知りあった友のこと、恩師のこと等。そしてこの6年間はけっして無駄ではなく、逆に得られたものの方が大きいと結論づけられたとき、再び修論に取り組む気力がもどってきたのです。

この論文で私の研究してきたものすべてを言いつくすわけでもないし、これからも数学を勉強し、研究を続けていくのだという決意を固めたのもこの3日間であったような気がします。

そしてこれは作り話でなく、そのように心が落ちつくと、今まで見えていなかったものが実に簡単に目の前に現われ、思わぬ早さで、(2、3時間考えていたと思いま

す)残っていた問題が解決したのでした。それは、非常にデリケートな部分に、私がすでに習った不等式を適用することで解決したのでした。まさしく逆転サヨナラという感じで、その時に、少し大袈紗ですが、発見する喜び、研究する喜びを実感したのでした。

このようにして私の初めての論文「垂下気泡問題における解の存在と正則性」が完成したのでした。

その論文を提出し、修士課程を修了し、たくさんの人達に助けられ、この母校である沼津高専に数学の教師として帰って来れました。

卒業した年から考えると、8年目に帰って来たこととなります。長かったようでよく考えるとアッという間でした。

私は浪人時代も含めてこの8年間で経験してきたことを生かし、この沼津高専をより良くしていこうと微力ながら努力していきたいと思います。何とぞ御指導のほど、よろしくお願い申し上げます。

また、この場をかり、私的な理由から原稿を書き上げるのが遅れ、御迷惑をおかけしたことをおわび申し上げます。

1987年2月末

風の強い日、自室にて。

近況報告

あれから20年も経ったのに

M1 白井 一夫

高専を卒業して20年、40歳になった。40歳といえば人生のど真ん中、仕事は現役再先端。身体は厄年を迎え曲がり角。「人生40にして感わず」と孔子は言ったが感うことばかり……。価値観が多様化しているためだろうか。

昭和37年日本経済の高度成長政策の中で全国で12校国立高専が設立された。県内外から中学卒業したばかりのエリート？達が金岡の仮校舎に集まってきた。その頃の友達の表情、一挙手一投足がまるで昨日のように思い出されます。その中にはすでにこの世にいない者も2~3人います。幸か不幸か我々一期生は何もかもが最初であるためフロンティアスピリッツが心の中に共有されているような気がします。

昭和42年千葉県にある日立精機に入社しました。そのころNC工作機械は世に出はじめたばかりでした。それが今ではエレクトロニクスの飛躍的發展により、生産の7~8割はNC機です。私は6年間現場(組立製造技術)に従事し、NC機、専用機、自動組立機等を担当しました。昭和48年現在の東芝機械に転職し、やはり現場(生産技術、製造技術)サイドの仕事をやってきました。ソ連、USA、カナダ、アルゼンチン等の国々へ機械の据え付けで生活する機会もありました。10年も20年も工作機会の製造一本やりでくと仕事ではまず自信が持てます。実に当然でしょう。しかし、世の中いろいろな仕事や分野があります。ちょっと違うセクション、分野に出くわすともう全くしろうとなのです。ギリシャの哲学者の言葉「なんじ、無知を知れ」がよく理解できる今日この頃なのです。

昭和61年そうです、今年の7月16日付人事異動で設計に移りました。オーバーに言えば20年の製造サイドから創造サイドへ変わったのです。軽いカルチャーショック？いやいやたかが工作機械大したことはありません。ちょっとマンネリ化してきた自分にはちょうどよい刺激剤です。事実と理論、現実と理想を確かめながら技術面でさらに成長したいと思っています。

ところで今や日本は経済大国とか呼ばれ貿易収支も黒字が続いています。しかし何となく豊かさを感じません。衣食住のうち住がまだ欧米の域に達していないからでしょうか。豊かさとはゆとりといってもよいでしょう。物のゆとり、心のゆとり、そして人生のゆとり……。ゆと

りを持つと成長や発展がにぶるのだろうか？大量生産で安価な物よりも少量でも本物を！という時代がきています。教育もそして人生も競争よりも個性を！と思います。しかし企業はムダ、ムリ、ムラを排除することによってCOST-DOWNをはかり他社との競争に打ち勝とうと必死です。やっぱり競争と豊かさ(ゆとり)は両立しにくいのではないだろうか。こう考えると豊かさは心の問題となる。人生観、物の見方、考え方、世界の動き、日本の動き、隣近所、そして自分自身の問題として帰還する。「人生40にして感わず」というのは今の私にはまだ成り立たないようです。

私の娘は天才か!?

E9 福山 一成

私は8年前に今の妻(別に後にも先にもほかに妻はいないのだけれど)と結婚し、満5歳になる娘とそして満7日(今日は11/11 誕生したのは11/4)の息子がいる。私は平凡に生まれ、育ち、そして私が入学する前まではもっと優秀な学校であった沼津高専を卒業し、現在、日立のサラリーマンとして人柄の良い優秀な中堅技術者となり世の中の大きな期待にこたえるべくせっせと仕事をしている。妻もまた平凡に生まれ、育ち、そして沼津の名門(?)商業高校を経て、妻が入学する前までは私は三島にあるとはしらなかった日大を卒業しつつ6年前までせっせとまじめに病院の患者さんの食事をつくる栄養士の仕事をして、今は人柄の良い優秀な忠犬主婦として我が家の大きな期待にこたえるべく毎日せっせと働いている。そんな二人から生まれた娘は、黒柳徹子のお母様ではないけれど『決してうちの子に限って、そんな事をするはずはございません。』なんてとても世間様に胸を張って言えず、『うちの子だから(我々の子供だから)そな事もするかもしれない?!』というような子に育っている。

そんな娘が4歳になる少し前にピアノ(そう私が子供の頃は庄家様かお大臣様のようなおうちにしかなかったあのピアノである。)を習い始める事になった。それというのも平凡な妻は世間の平凡なお奥様達と同じように、『是非、娘にピアノを!!』と考えていたのであった。(ちなみに私は今マンションに住んでいるが、囲りはピアノだらけなのであります。)なにしろ本人(妻の事)は今から少し(?)若い頃仕事の終わった後、町のエレクトー

ン教室で20(ハタチ)の手習いをしていたが『ピアノ→エレクトーンはOK』でも『エレクトーン→ピアノはNG』、すなわちピアノを習っていればエレクトーンを弾く事が出来るけどその逆は無理と強く信じ込んでおりました。『やらせるなら、ピアノを!!』という風でありました。

私は娘には(実は最近息子にもと思っているが…)何か一つでも良いから他の人にまけない自分にとってそれが大きな自信となる様なものを身につけさせたい(一芸は道に通ず;何事によらず一つの技芸を修めてその道を究めるということは人間の生きる道を究めるのと同じものがある。と物の本には書いてあります。)と考えていたのでそれがピアノになるかどうか娘がピアノに興味を持つか、娘が音楽の才能があるかどうかわからぬが大きな興味と小さな期待を持って娘がピアノを習う事に賛成した。ところが娘がピアノを習い始めるとすぐに今度は『娘に、ピアノを!!』と妻は言い始めた。なにしろ私の『娘にピアノを!!』は娘にピアノを習わす事であり娘にピアノを習う事ではない。それに娘がピアノを本当に続けられるかどうか分からない(娘本人も他の人も誰も分からない。)のに、まだ世の中の大きな期待にこたえられない日立の中堅技術者見習いの給与では家(マンション)の借金の返済をするのに精一杯で(庄家様かお大臣様ならともかく!!)ピアノは大変高い買物である。それに我が家にはエレクトーンが1台鎮座しておりそれを使って練習すれば十分!!との考えでピアノを買うのは反対だった。しかし、これが神様のおかげか?!(日頃より中堅技術者見習いの仕事ぶりを天の神様が見守ってくれたのかもしれない。)娘のピアノの先生がピアノをグランドピアノに買い変えるので今使っているピアノをゆずってくれるという。まさに渡りに船でそのピアノを安く購入した。それから私は庄家様かお大臣様になった気持ちで毎日毎日中堅技術者となるべくせっせと働いていた。

そして、6ヶ月経た頃娘のピアノを弾いている曲を見て驚いた。#とか♭がいくつも5線譜の上に並んでいる大人の私が見ても難しそうな曲を弾いているのである。これには私も大変驚いた、『私の娘は天才か?!』平凡な両親から生まれた音楽の知識もない4歳の女の子がどうしてそんな難しい曲を弾く事が出来るのか私は大変不思議であった。どうしてなのか?どうしてなのか?しかし、その答は簡単な事であった。それは『練習』である。毎日毎日の練習の積重ねがそうさせていたのであった。私が高専にいる時朝起きてから寝るまでテニスの事を考え毎日毎日繰り返していたあのテニスの練習と同じである。(その割には私はテニス一流プレーヤーにはとうとうなれなかったが…)私は娘から大事な事を教わった。

中堅技術者の道は険しくそしてはてしなく遠い!!しかし4歳の女の子にピアノが出来て、32歳になろうとしている大人に出来ないわけがない。毎日毎日ぬい目をこすり朝起きて朝食を摂る間もなく家を出て会社へ向い夜もふけ家に着けば明日の為にすぐ寝る生活。たとえば工場と一つの家がある影絵の中でだんだん家の囲りが明るくなるとひとりの男が家を出て工場へ向う、工場から煙がのぼり、そして囲りが暗くなると工場からひとりの男が家へ帰りまた家の囲りが明るくなると男が家を出ていくような、そんな毎日毎日の私の生活(時に時間があると酒を飲みカラオケを歌う生活)の中に光が見えたのです。私も頑張ろう!!

娘は今、満5歳、ソナチネを弾いています。

早稲田を卒業し昨年日立に入社した私のいとこが(彼らは高校時代ブラスバンド部に所属しその道に詳しい。)私の娘を見て言った。

『かずちゃん!!樹里は天才だよ!!』

(補足 ①かずちゃんとは私の呼び名
②樹里とは私の娘の名前)

近況報告もどき

M16 佐田 剛

長い間御無沙汰しておりますが、皆様お元気でしょうか。円高で厳しい情勢の中、皆様も日夜頑張っている事と思います。

沼津の地とも大分縁遠くなってしまっていたのですが、今年の七月に同期の山口芳広君の結婚式に御招待頂き、四年振りに沼津の地を訪れました。東レの工場を見た時には、何とも言えない懐かしさが胸に込み上げてきました。良き青春時代を過ごした沼津の地、二日酔いをしてしまい頭はクラクラ、胃はムカムカ、その症状が丁度その当時流行っていた風邪の症状とよく似ていたので、風邪を引いてしまったという事にして学校をサボってしまった日々、友とバカな事をやって遊んだ日々、沼津には楽しい思い出がいっぱい詰まっています。山口君とはよく遊び、よく学んだ仲間でした。山口君は本当に素敵な人だから、きっと素晴らしい人を嫁さんにするだろうなどその当時から思っていました。全くその通りでした。また、その場で大橋定教授の理知的でおもしろいお話を拝聴することができ、先生の偉大さを改めて感じました。(少し歯が浮いてしまったようです)

近況報告を書いてくれという事だったのでですけど、私は今年鈴木自動車へ入社したばかりで、何を書いていい

のかわからなくて適当な事を書いてしまっています。朝七時に眠い目を擦りながら、我が愛車スズキカルタス（カルタスは軽自動車ではないので御注意を）に乗り、一時間程かけて会社に通っているというのが私の現在の主な状況です。仕事についていろいろと書きたかったのですが、何分まだ新人ですのであれこれと小間使いみたいな事をやっているというような有様であり、私自身の仕事について書く様な事は頭に浮かんできませんでした。その代わりに、同期でM16の牧野守宏君、谷口隆彦君、他の沼津高専卒業生の方々が、鈴木自動車に於いて生産活動、研究活動等、仕事の面ではもちろんの事他の面でも活躍しており、会社発展のための大きな原動力になっているという事を報告しておきます。また私といっしょに今年同期の堀算伸君が鈴木自動車へ入社しました。二人共々沼津高専の卒業生の名前に恥じない様、頑張っていると思っています。

社 会 人

(東芝機械) E16 四 條 弘 次

「近況報告という形で、何か書いてくれ」と依頼されて、まあ、そうたいして大変ではないだろうと、気楽に引き受けてしまいましたが、実際に原稿用紙に向かってみますと、さて、一体何について書けばいいのだろうか、はたと困ってしまいました。いかに最近、形式化された文章しか書いていないかという事を、いみじくも悟ってしまったわけで、いやはや、これは結構大変だと、今になってようやく理解しましたが、既に後の祭りです。まあ、所詮、物書きの才能なぞないのだから、内容が散文的になってしまうのは、御容赦願うとして、私の近況、最近思う事などを述べてみたいと思います。

私は、昭和57年に母校、沼津高専を卒業し、自宅から通勤できる企業という割と安易な理由で（決して、それだけではありませんが）東芝機械に入社し、ようやく5年目に入ったばかりの、まだまだ駆け出しの社会人です。（もっとも今の私は、一時間以上かかる通勤時間に負けて、通勤時間5分という会社の寮に住んでいます）学生と社会人の違いとは何かと考えてみますと、最大の違いはもちろん、お金を払う立場か受け取る立場かですが、その他の大きな違いは、人間関係についてだと思います。学生であれば、気の合わない人、嫌いな人とは付き合わなければそれで何ら問題がないわけですが、社会人では、そういうわけにはいきません。私が、まだまだ駆けだしだと思ふところは、この点についてです。これは決して自分を偽って付き合うという事ではなく、相手

を認めるゆとりといった物が社会人としての必要条件であると、最近思うようになりました。（後、5年いや10年もたてばこの点においては、社会人になれる……かな？）

ところで、社会人として果たさなければならない義務は、やはり仕事をする、という事です。私は入社以来ずっと、ソフトウェア開発に携わってきました。ソフトウェアは、我社のような工作機械メーカーにとっても、自動化、高度化といった事に欠くべからざる物であると思われれますが、ソフトウェア開発自身は、自動化がほとんど進んでおらず、言うなれば、今だ、手作業にて開発が行われている状態です。という事は、学生時代に習った事が十分生かせる希有な仕事であるという事ができます。（もちろん、エンジニアではなく、プログラマとしては、ですが）私も、計算機の講義は決して好きな方ではありませんでしたが、当時教わった事が貴重な経験となっています。ところで、ソフトウェアの開発という仕事は、手作業である以上、個人の能力によって大きく効率、能率が違ってきます。言い換えれば、ソフトウェアの質が、そのまま、個人の能力を示しているとも言えます。（もちろん、仕事に関しての、です。）入社した当時のプログラムと、現在のプログラムとを比較しただけでも、相当の開きがあるのが分かりますが、今だプログラマの域を出ているとは、言いかねる状態のように思われます。

ようやく仕事もおもしろく感じられるようになってきましたので、次回に原稿を頼まれた時には、自信を持って「私は、システムエンジニアです。」と言えるようになっていたいと思います。その時、真の意味で「社会人」となれるように思われます。

男女平等の難しさについて

C13 山 口 淳 子 (旧姓 青山)

私は会社に入ってから四年目になりますが、まとまった文章を書くのはこれが初めてです。文章を書くことが大の苦手の高専生にとっては、同窓会誌の原稿依頼をどれほど恐れているか共感していただけると思います。

さて、申し遅れましたが、私今年の七月に結婚いたしました。そろそろ四カ月になるとうしているわけですが、生活がやっとリズムに乗り始めたという感じのところですが、結婚したと言うと、“仕事は続けるのですか”とよく聞かれます。“はい”と答えても、最近では何の驚きもないようです。だんだん女性が働くことが普通になってきたのだなと感じています。そういうこともありまして、最初に掲げたような、男女平等という言葉に多少敏

感になっているのかもしれませんが。このことを、より身近に感じるようになったきっかけは、何といても今年の四月から施行されました、男女雇用均等法の制定でありましょう。私も新聞でちらりとその内容を見たに過ぎないので、細かいことはわかりませんが、私なりに考えてみたことがあります。そのひとつは、日本は欧米の真似をしてばかりいるなどということです。社会的に平等な扱いをするのは当然のことであり、良いことだと思ふのですが、その前にもっと基本的なことが同等になってからの話だと思ふのです。と言いますのは、たとえば家事・育児は女の仕事であるという考え方がまだ根強く残っています。外国ではどうでしょう。家事と育児は男女同じく責任を持ち協力するものだという考え方をしています。その上での男女平等はうなづけます。日本は、昔ほどではないけれど、まだ男女平等も法律や口先だけのもの（と言っては大きですが、・・・）という感じが抜けません。生活や考え方そのものが変わってからでないという意味がないと思ふのです。

もうひとつは、男性の保護も考えなくてはいけないのではないかということです。私達女性には、働く上でいろいろな保護法がありますが、男性はどうでしょうか。あってもないのと同じようなものばかりです。まったくかわいそうだと思います。“男性の保護法をつくる”という方向からの平等も計れるわけですよ。男性が家事や育児の都合で会社を休むことがあったりしてもおかしくないと思ふのですが、今の世間の目はどうでしょうか。“男のくせに”この一言でしょう。本当に男女平等がしっくりくるのはいつのことでしょうか。

最後に、夫が男女平等をどのように受け止めているか知りませんが、毎日皿洗いをやってくれる人であったことに感謝しつつ、ペンを置くことにします。

近 況 報 告

E18 佐 野 弘 和

日本DECフィールドサービス（技術部）に所属。仕事内容は、DECのコンピュータの保守、及び修理。具体的には、販売したコンピュータの設置、そして稼働までの準備。設置後は、そのコンピュータに対して、定期的な保守の実施、又、故障が発生した際の修理などが挙げられる。更に、我々は日本DECとして、お客様に直接接することが最も多く、即ち、日本DECの顔、窓口となるため、修理のための技術力だけでなく、お客様に対しての豊かなコミュニケーション能力も要求される。と言うのが、現在の私の仕事でして、今年でもう3年目

にはいつてしまいました。つい3ヶ月前までは、沼津のサービスセンターにて、母校のVAX11/750なども保守していたのですが、今は横浜に転勤となり、不慣れた土地で毎日忙しく動きまわっています。

仕事はとても楽しいです。この会社、この仕事にして心から“よかった”と思っています。修理屋ですから、毎日仕事の内容が違う訳で、異なるカスタマー、異なる機械、異なる故障、二回と同じシチュエーションで仕事をする事はないのです。そのため、常に、いつ、どこで、どんな故障が発生するかわからないと言う緊張感があります。おかげで飽きがきません。楽しい理由の最大のものが、これです。次にたくさんのいろいろな人と出会えると言うのがあります。“出会い”と言うと何か大袈裟ですが、横浜のような大都市では、カスタマーの数は数百にも登ります。従ってそれだけのコンピュータ使用者がおり、必然的に、その方々とはお知り合いになれるということになります。その中にはいろいろな人がいます。すぐにかっとなって、とにかく無茶苦茶怒る人、グリグリと平気な顔でイヤ味ばかり言う人、コンピュータは散々壊れているのにニコニコ笑っている人、すっごく頭のいい人、そして、こんな仕事にはもったいないと思うような可愛い女の子。だから、世界が、とても広くなるのです。いろいろな所に、様々な人がいて、働いている。そういうのを見られると言うだけでも、それはとても貴重な経験だと思ふのです。無数の工場、事務所、病院、普通では外部からは入場できないような研究所、果ては、観測船から米海軍の基地へも行きました。そして重要なことは、それらの仕事を自分で管理できるということです。DECでは、カスタマーサービスに関しては、アカウント制と言う方式をとっています。それは、各エンジニアにすべてのカスタマーを割り当て、そのカスタマーに関しては、すべてその割り当てられたエンジニアが対応をし、その仕事をアレンジすると言うものです。ですから、すべて自分です。故に自分の主義・主張を十分に仕事に反映させることができるのです。しかし、逆に、自分でしないと誰も助けてはくれませんが、とにかく、誰かに命令されてする仕事ではないのです。これで仕事がつまらないはずがありません。ヤリ貝もどんどん大きくなります。他にも、DECの社風とか、オフィスの雰囲気とか、私の気に入っている点を挙げたら、まったくキリがありません。こんな調子ですから、今の仕事にはもう大満足。まったく非の打ちどころもありません。

しかしながら、本来の私としては、現在のような仕事楽しい状況は理想としていたものとはまったく逆なのです。学生時代から、仕事はあくまで生活のためのもの、人生はそれ以外の何かに向けられるべきで、仕事即ち人

第24回東海地区高専大会

総合成績表

| 種目 | | 順位 | 優勝 | 2位 | 3位 |
|----------|------|---------|---------------|----------------|---------------|
| 陸上競技 | | | 鈴鹿 | 豊田 | 沼津 |
| 軟式庭球 | 団体の部 | | 岐阜 | 豊田 | 鈴鹿 |
| | 個人の部 | | 木寺 (岐阜) 岡崎 | 味岡 (岐阜) 栗山 | 安井 (岐阜) 森 |
| サッカー | | | 沼津 | 岐阜 | 豊田 |
| 空手道 | 団体の部 | 総合の部 | 豊田 | 鈴鹿 | 鳥羽 |
| | | 組手の部 | 豊田 | 鈴鹿 | 鳥羽 |
| | | 形の部 | 豊田 | 鈴鹿 | 鳥羽 |
| | 個人の部 | 組手の部 | 赤谷 (豊田) | 小林 (豊田) | 長井 (豊田) |
| | 形の部 | 神田 (鈴鹿) | 大野 (鈴鹿) | 松下 (鳥羽) | |
| 弓道 | 団体の部 | | 沼津 | 豊田 | 鈴鹿 |
| | 個人の部 | | 深田 (豊田) | 栗田 (沼津) | 中埜 (沼津) |
| 体操 | 団体の部 | | 沼津 | 鈴鹿 | 豊田 |
| | 個人の部 | 床運動 | 瀬戸 (沼津) | 半田 (沼津) | 伊藤 (沼津) |
| | | 跳馬 | 半田 (沼津) | 大湖 (鈴鹿) | 伊藤 (沼津) |
| ハンドボール | | | 豊田 | 鈴鹿 | 沼津 |
| 卓球 | 団体の部 | | 豊田 | 岐阜 | 沼津 |
| | 個人の部 | ダブルス | 志賀 (豊田) 吉野 | 五十嵐 (鈴鹿) 帆引 | 院田 (鈴鹿) 峯田 |
| | | シングルス | 志賀 (豊田) | 高橋 (豊田) | 渡辺 (岐阜) |
| 水泳競技 | | | 豊田 | 沼津 | 鳥羽 |
| 剣道 | 団体の部 | 全国大会予選 | 鈴鹿 | 沼津 | 岐阜 |
| | | 勝抜戦 | 鈴鹿 | 沼津 | 豊田 |
| | 個人の部 | 個人戦の部 | 内田 (豊田) | 大野 (沼津) | 荒木 (鈴鹿) |
| バスケットボール | | | 岐阜 | 豊田 | 沼津 |
| 硬式野球 | | | 岐阜 | 鈴鹿 | |
| 柔道 | 団体の部 | 全国大会予選 | 沼津 | 鈴鹿 | 豊田 |
| | | 勝抜戦 | 沼津 | 豊田 | 鈴鹿 |
| | 個人の部 | 軽量級 | 鈴木 (沼津) | 鳥 (鈴鹿) | |
| | | 中量級 | 伊藤 (鈴鹿) | 斎藤 (岐阜) | |
| 戦部 | 重量級 | 岩田 (沼津) | 片又 (沼津) | | |
| 硬式庭球 | 団体の部 | | 豊田 | 沼津 | 岐阜 |
| | 個人の部 | ダブルス | 古川 (岐阜) 中田 | 成瀬 (豊田) 伊藤 | 高木 (豊田) 天野 |
| | | シングルス | 小林 (岐阜) | 森田 (岐阜) | 江草 (豊田) |
| バレーボール | | | 豊田 | 鈴鹿 | 岐阜 |

生では、あまりに寂しい。と、このように思っていました。ですから、よく外国から非難される典型的な日本人のように、とにかく仕事仕事になってしまうのはどんなことがあっても避けたいと思っていたのです。しかし、今のペースで、このまま仕事を楽しいと、そうになってしまうのも時間の問題で、今に休日ですら出勤するようになるのかと、とても恐怖しています。それで、今はもう少し進歩して、まず、人生を通じて情熱を傾けられる何かを見つけて、そしてそれに全力で向かって生きて行きたい。その何かは仕事であってもいいし、そうでなくても構わない。ただ常に自分が熱えられる何かであればいい。ではそこで今の私は、たとえば、その何かを持っていないのです。つまり到着すべきゴールが見えない。確かに、仕事は面白いし、そう言う点では非常に幸せだが、それは、人生の目標に向かって、その結果得られたものではないのです。だから、今はただ流されているだけと言う感じがとても強く、たまたまその流れの方向が良くて幸せな状態にあるのではないかと思うのです。人として、考える力のある人間として生まれてきたのだから、何かしらの目標やゴールを持って、それを達成させるために一生懸命になって生きて行きたいと思うのです。人生のすべてが、その目標のため、仕事も生活もすべてその目標があってこそ存在するものにしたい。それでこそ、人生に価値が見い出せるのではないかと思うのです。老いた時、自分は真っ直ぐに生きてきたと言える頑固なじいになれば、なんて思います。

と言うことで、最近の私は、こんなことを考えています。ですから、一刻も早くそのゴールを見つけて、エンジンをスタートさせたい、なんて思っていますが、先のことは私にもよくわかりません。ですが、案外、こんなことを言っている奴に限って、極平凡に結婚して、1、2年して子供ができると、急に親バカになってしまって、「俺の人生は、この子のためにある」なんて言うものでは……心配。

私にとっての仕事と結婚

C15 渡辺 さわ子

私は今、富士市にいます、日本食品加工(株)に勤務しています。仕事は、研究所で開発品の分析やサンプルの発送、他の方の実験補助をしています。今度の春で丸2

年になるわけですが、まだそれだけか…といった感じですが、各グループ(各係)に女子社員1人ずつという環境なので、“母は強し”という感じで前にも増してたくましくなっております。グループのそれぞれ各人が、何かんやと仕事を下さるので、毎日ほとんどパニックで働いています。仕事といっても、報告事項と期限をいうだけでやり方は本人の自由なのでそれなりに考えやっているので、まだマンネリ化はしていません。

…が、はっきりいって私供の会社は頭が固く、古くさいのです。だから、どんなに社会で男女雇用がウンヌン騒ごうが、組合が問題にしようが肝心な所で立ち消えているのが現状なのです。でもこの問題は会社のせいだけではありません。私たち女子社員のふんい気として、どうだっていいという感じなのです。話してみれば、私のように今のままズルズルと“ただの手伝い”でいたくないと思っている人が多いのに、どうもその気持ちを表に出すチャンスがないようなのです。

私事なのですが、私は今年の5月に結婚します。自分では全く会社をやめるつもりはありません。5年間高専に行き学んだ事、これからが生かせる時だと思うのです。今の1人暮らしと結婚後の生活、何も騒ぎたてる程違う訳ではないでしょうに…。未来のどんな様も私自身が納得いくまで仕事は続けるといい。とってくれています。又彼は高専時代に寮生活、下宿生活を体験し、今も寮生活ですからやる気にさえなれば自分で何でもできます。だから大丈夫なのです。でも…。私の職場では、ひどく私の結婚の事を気にするのです。というのも、私の前の方は、結婚して2年は大きくなならないはずだったおなか、わずか1年で大きくなってしまい、私が入社するのを待ちかねたように、退社されたのです。その頃、いろいろ大変な思いをされた方がいるわけで、その方々にしてみればそんな事2度とあつたら困るわけです。ですから、結婚のケの字でも聞けばひどく神経質になり、おめでたい事…とは3日位したら思ってくれるのかもしれませんが。だからといっていつまでも会社に独身ですわられても困る。と思っているのです。

私は、まだ数年今の会社でがんばります。でも、この気持ちまだまだ心配されています。そんな心配をなくしてもらって、会社にいるためにも私自身もっとしっかりしてはと思います。そしてもっとたくさんの女性がいろんな事に積極的になって、それを理解してくれる殿方がもっと増えたら、この世の中もっとおもしろくなるでしょうネ…。

慶 弔 報 告

西島治郎君の思い出

M12 渡 辺 光 弘

「西島君去る」の連絡を受けたのは、一昨年夏休みのある、むし暑い日であった。

学生時代柔道部に在籍し、スポーツマンそのものであった彼が病に倒れたと聞き、一瞬自分の耳を疑ってしまった。

話によると彼は持ち前の気力で病をおして、入退院を繰返していたそうである。彼の温厚な人柄と、あのいつもにこにことしていたにきび顔でクラス全体に笑いを振りまいていたのを思い出す仲間も多いに違いない。卒業後特に連絡を取り合うことはなかったが、やはり寮で同じかまの飯を食べていた仲間が去ってしまうのはさみしいものである。ここに西島君の御冥福をいのります。

江並昌一君に思う

C15 大 嶽 讓 治

本格的な86年の夏がそろそろという頃、機械科の友人からの深夜の電話で初めて江並君の病気を知った時、正直言ってガク然としたのを覚えています。静岡大学工学部へ沼津高専卒業と同時に編入し、大学生活を、fullにenjoyしていたはずだと思っていた江並君が、不治の病にかかって、あと一週間程の命とは、とても信じられない思いでした。

私達のような二十代前半、しかも学校を卒業して2年もたたないうちに、同窓の友人を亡くすというのは、つらいというより、何か釈然としない、ピンとこないものがありました。

思いおせば、様々な彼の思い出が浮かんで来て、気持ちはつきないばかり。もうこれ以上は何も書きたくない気持ちです。

慎しんで江並昌一君の御冥福をお祈りいたします。そして彼のことは永久に忘れません。

住所不明者のお知らせ

下記の方々は転居先不明又は住所記述不正確によって同窓会の発行物が返却されて来ました。早急に正しい住所を同窓会本部までご連絡下さい。

M4 杉山滋、鈴木俊一、吉田友久

M6 飯田次男、星野晴次

M8 井出清昭、山本薫

M9 植田修、佐藤芳邦

M10 福本常樹

M11 戸次義晴

M12 川崎正敏、椿浩幸、松本主吉、山内俊明

M13 白鳥弘敏、松浦靖幸

M14 小川哲、杉山使

M15 五十嵐成治、井出寛、中山昭弘、和田宏二、
平垣正善、松井伯夫

M16 友田光弘

M18 太田靖

M19 村田浩成

E2 岡田克己、斎藤正樹

E4 加藤昌裕、田代六美

E5 鷹野真次

E7 伊藤幸夫、島本豊、長尾宣和

E8 佐藤良信、長沢保雄

E9 三島正夫

E13 石橋修、佐野勝敏

E16 篠宮知宏

E18 稲葉正孝、梅沢浩基

C1 長田豊司、杉本敏博、鈴木博水、松浦勇

C2 市川衛

C6 中村不二雄

C10 小山哲雄、小林富子

C11 深沢博之、松本竹雄、水越直樹

C12 小川薫、三宅基靖、八木昌宏

G 太田裕紀、山浦一友

編 集 後 記

先日某大学の同窓会誌を見せていただきました。A5判50頁ほどの冊子でしたがなんと隔月で発行しているとのこと。たぶん同窓会専従者がいて原稿集めや編集を行っているのだらうとは思いますが、何ともうらやましい限りです。隔月で発行できるのでから内容もニュース性に富み、同窓生子女の良縁募集欄もありました。新橋には同窓会経営のクラブまであるそうです。我同窓会も早くそんな組織になりたいものです。

さて今回の同窓会誌は教職員及び会員の方々の御協力により同窓会創設20周年記念誌としてまとめ上げることができました。寄稿して下さいの方々、御協力いただいた方々に深く感謝いたします。

我同窓会はようやく成人式を迎えたところであり、これからまだまだ成長し発展していこうという最中です。同窓会誌もそれに伴ない内容を充実させ、発行頻度も増加させたいと思います。今後もよろしく御協力下さい。

同 窓 会 誌 第 11 号

昭和62年3月15日 発行

発行責任者 諏訪部 豊

発行所 沼津工業高等専門学校同窓会

〒410 沼津市大岡 3600

TEL <0559> 21-2700

郵便振替口座 東京2-102151

印刷所 ジャパンコミュニケーション

〒410 沼津市柳町3-15

マルトモV3F

TEL <0559> 23-0123